

本論 第一章 第一節 齋宮の衰微

註一

○續史愚抄卷十八 元徳二年十二月條

十九日乙丑 一品權子内親王 今上第一皇女 母中宮禮子 卜<sub>二</sub>定齋宮<sub>一</sub> 御年十六

二

○續史愚抄 元弘元年八月條

二十日癸亥 齋宮一品權子内親王 御年十七 今上第一皇女 母中宮禮子 於<sub>二</sub>河原<sub>一</sub>禊。其後入<sub>二</sub>給野宮<sub>一</sub>

三

○續史愚抄 元弘三年十二月條

十二月二十八日戊子 祥子内親王 今上第二皇女 母從三位藤原朝臣廉子 卜<sub>二</sub>定齋宮<sub>一</sub>

○皇代曆

齋宮 賀茂無之 祥子内親王當今皇女 母同東宮 元弘三年十二月二十八日卜定

四

○新葉和歌集 神祇歌(卷第九)

野宮より退下の後雪を見て

祥子内親王

忘れめや神のい垣のさかきばにゆふかけそへし雪のあけぼの

野宮に久しく侍りける頃夢のつげありて

大神宮へ百首の歌よみて奉りける中に

いすゞ川たのむ心はにこらぬをなど渡るせのなほよどむらむ

五

○耕雲紀行(應永廿五年)

こゝかしこゆきて、齋宮のつしといふ所あり。むかしの齋宮のあととなり。木竹しけりあひて、いつくともみえぬやふのうちなり。あれてひさしけれども、いまもそのしるしに、空より絵馬をかくることたえず。これによりて土俗あるひは多むまのつしともいふとかや。

○伊勢參宮紀行(堯孝) 永享五年彌生十九日條

齋宮と申わたり過侍るに、むかしおほゆる事とも侍りし申にも。天曆の「御」(イ本ナシ)時かとよ。齋宮くたり給ふけるに、朝忠中納言「奉」(イロ本ナシ)奉送に侍(り)(イロ本)て、万代のはしめとけふをいのり置いていま行末は神そしるらんと詠せし事おもひ出られ侍りて

万代といのる心も(は、ロ本)けふそへんいつきの宮のあとを尋ねて

○東遊紀行 谷重遠

齋宮村

家家縫<sub>レ</sub>笠菅如<sub>レ</sub>玉、物産村名得<sub>二</sub>細尋<sub>一</sub>

懐古監垂<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>忍、竹都草綠野宮森 (野宮ハ齋宮ノ誤リナラン)

註一

第二節 神領退轉

延喜式卷四 神祇四 伊勢太神宮

凡三神郡并六處及諸國神戸者、不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>舉正税<sub>一</sub>

神田卅(卅) 六町一段

大和國宇陀郡二町

伊賀国伊賀郡二町

伊勢国卅(卅) 二町一段(註略)

右神田如<sub>レ</sub>件…下略

封戸

當國 千八百卅二烟(註略) 百七十烟(註略)

度會郡 多氣郡 三百卅四烟(九) 飯野郡

飯高郡 卅六戸 三重郡 應和二年七月廿三日 奉加二百一烟(九) 壹志郡 廿八戸

安濃郡 卅五戸(註略) 鈴鹿郡 十戸 河曲郡 卅八戸 桑名郡 五戸

(註略)

諸國

大和國 十五戸 伊賀國 廿戸 志摩國 六十六戸

尾張國 卅戸 參河國 廿戸 遠江國 卅戸

二

○神宮雜例集卷第一「群書類從卷第四」

第四神封事 付神田并御領 に依る。

○延喜式以後に寄せられた神郡ハ

1. 員弁郡 天慶三年八月廿七日 二百烟

2. 三重郡 應和二年二月廿三日 二百一烟

3. 安濃郡 天祿四年九月十一日 三百八十九烟

4. 朝明郡 寛仁三年九月十一日

5. 飯高郡 文治元年九月九日

以上神三郡と併せて八郡である。

○諸國神戸の増加ハ延喜式當時の二〇一戸より、四六一戸となつてゐる。内譚ハ

尾張 七五 參河 七五 近江 五〇 志摩 六六 美濃 五〇

信濃 二五 遠江 五〇 大和 一五 伊賀 三〇

△神田ハ式の「神田三十六町一段」に御常供田五十九町二段百廿歩が増加してゐる。

△御厨御菌事 合四百五十餘処

二宮御領百十餘所

内宮御領二百餘所

外宮御領百卅餘所

とあつて所在地が夫々明記されてゐる。所在地域ハ伊勢国内に限られてゐる。

三

○神鳳鈔伊勢太神宮造替遷宮事日食米処々註文 (群書類從卷第九)

に依る。今各種神領全部を國別に分けると次の様になる。

大和國 一 撰津國 一 伊賀國 十一

伊勢國 千四十八

度會郡	百	多氣郡	六十	飯野郡	五十一	飯高郡	百廿二				
一志郡	五十六	安東郡	六	安西郡	二百六十九	奄藝郡	三十六				
鈴鹿郡	二十六	河曲郡	四十一	桑名郡	十五	三重郡	百九				
朝明郡	五十五	員弁郡	百十二								
志摩國	七十五	近江國	十	美濃國	八	尾張國	五十五	參河國	三十五		
遠江國	二十二	駿河國	七	伊豆國	二	相模國	一	武藏國	六		
上野國	十	安房國	二	上総國	一	下総國	五	下野國	二	常陸國	一
甲斐國	一	飛騨國	一	信濃國	九	越前國	四	越中國	三	越後國	一
能登國	三	加賀國	一	伯耆國	二	丹波國	一	丹後國	三	但馬國	一
若狹國	一	播磨國	一	備前國	一	備中國	一	長門國	一	伊豫國	三
讃岐國	一	阿波國	一	合計	千三百四十三						

別に神田次の如し

度會郡	二段一所	多氣郡	一段一所	飯野郡	二段一所	飯高郡	一所
安濃郡	三十七所	三重郡	二十二ヶ所	朝明郡	四所	員弁郡	一所
奄藝郡	二ヶ所	河曲郡	三所	一志郡	六町一所	合計	七十四ヶ所

四

○太神宮參詣記に見える神領退轉の條(通海)

但其時ノ太神宮ノ御勲功ノ勤賞ニ寄ラレシ遠江國濱名ノ神戸ハ、大江助朝、弘安八年ニ武威ヲ以テ神宮任符ヲモチイズ、同職ヲ横ニ奪取テ侍リシカ、其年ノ冬助朝父子、城ノ入道ノ手ニテ討レヌ。後ニ武家没所トナリテ、今申シ披ラカサレハ神祝(稅カ)ヲモソナヘス、神ワサニモシタカハス。又同キ勤賞尾張ノ神戸モ武家ノ人押領シテ神役ニモ不レ隨、彼是聊侍ラン。何レモ太神宮ノ勲功ナレハ、公家モ召返シ給ベカラス、何ソ況ヤ武威ヲカリテ押取ヘクモナキコト也。參河ノ神戸一所ゾ未ダ神役ニ隨侍ヘシ、永ク改滅不レ可レ有由ノ格ノ文舉(乖)違スル者頭レハ違勅ノ罪ヲ以テスベキ由、延曆貞觀ノ宣旨ニ侍ルメリ。長元ノ御託宣ニ伊賀ノ神戸ノ訴訟ニ依テ、伊賀守光清伊豆國ニ配流ノ事ハ、其根元ヲ云ニ極テ狭少ノ事ニ有リト云ヘトモ、神宮ノ御事ノイツクシキニ依テ也ト侍ヘリ。此兩神戸ノ事御託宣ハ長曆ヨリ後ハ不レ可レ有ト申侍ヘレハ、御神ノ御心ノ内ハイカトトオホツカナシ。

通海參詣記上 一次瀧原並宮條 兩所軒ヲナラヘテ阿曾ノ御杣ト申。豊受太神宮ノ杣山ニ御坐アリ。太神宮ノ西ヲ去事九十九里也。……

然共宮地ハ近比當宮權禰宜ナニカシト申侍シ者、名主職ヲ傳ヘタリトテ權門ニヨセ奉シ後京都人(ノ脱懸)領トナリテ神宮ノ管領ヲ離タリ。太神宮臨時ノ祭ノ假屋。此所ノ役ニテ有。始ハ權門ノ雜掌。神宮ノ使ヲ入サルニ依テ、功人ヲヨセラレナトシ侍ニヤ、カトル程ニ、近年盜人此山ニ籠タルヲ領家シツメ給事ナキ故ニ、守護代彼ヲ誅シテ、守護領ト成ヌ。……以下御歷朝押領御寄進ノ事……延曆十六年四月十四格ニハ、太神宮(ハ脱懸)天下諸社ニ異也。餘剩アリト云トモ改滅ノ限ニ非スト侍リ、貞觀二十年十一月九日庚辰格ニハ。太神宮(事脱懸)ノ諸社ニ殊也。宜ク延曆十六年四月十四日ノ格ニ依テ、永ク改滅ナカレ。若シ乖忤カハ科スルニ違勅ノ罪ヲ以テスヘキヨシ侍ヘレ共郡郷ノ司并名主百性(姓)役ヲノカレムカ爲權門ニ寄セ奉レハ宣旨院宣ヲ離レテ改滅ノ事

ノミアレハ神宮ノ衰微アサマシトモ申計ナクコソアレ。

五 ○万一記

文保三年正月十三日、天晴、仙洞評定始也、云云：中略：神宮條々先可有其沙汰、内外宮正殿別宮假殿遷座、念可被遂行、内宮心御柱去年爲鼠喰落云々、内宮別宮瀧原並等殿舎及朽損、御體被侵雨露、外宮別宮荒祭月讀宮、盗人參昇盜取神寶、有假殿遷宮可被奉獻神寶、而先御代無沙汰也、當代又然、是則用途無其足之故歟、神宮領闕所事、天慶天祿以來、或被載宸筆宣命、或被下不易宣旨、往代奉寄神領也。而當時知行之新主有罪科者、雖被改被知行、神宮宮領不可有相違之處、先御代稱闕所、或爲朝恩被知行、男女或寄附佛閣、當御代亦如此、神慮難測以二件所被返付神宮、云内外兩宮正殿別宮假殿御裝束並別宮神寶等用可其沙汰哉

六 渡邊世祐博士

「戦国時代の神宮」（神道學雜誌第八號）

第一 神宮の廢頽の條に参照

七 吾妻鏡

壽永元年十月十五日條

文治二年三月十日條 同六月廿九日條 同潤七月廿八日條

文治三年正月廿日條 同五月廿六日條 同六月廿日條 同廿九日條

同九月廿七日條 同十月十三日條

文治四年十二月廿四日條

文治五年七月十日條

建久元年二月廿二日條 同五月十九日條 同六月六日條 同月廿九日條

八 ○西源院本 太平記 第三十六卷

一 仁木京兆參方事并太神宮御託宣事

近年此人伊勢國ヲ管領シテ在國シタリシニ、前々更ニ公家武家手ヲサハサル神三郡ニ打入テ、太神宮領ヲ押領ス。依レ之齋主神主等京都ニ上テ、公家ニ奏聞シ武家ニ觸訴フ。開闢以來未懸ル不思議ヤアルトテ、嚴密之綸旨御教書ヲナサレシカ共、義長曾テ承引セス。剩我ヲ訴訟シツルカニクキトテ、五十鈴川ヲセイテ魚ヲ取、神路山ニ入テ鷹ヲ仕フ。悪行日來ニ重畳セリ、：

九 ○南方紀傳下（史籍集覽通記第十一）

永享十二年七月廿九日条

伊勢國司滿雅卒後實樹院殿息男中將顯雅在二大河城（内敷）一、小將教具在二多氣城一、數代雖盡忠孝於南帝、南方威衰、國司獨難立、義教頻請和融、親之盡懇情、招レ之、顯雅懷惠歸二服京都一、將軍感悅餘、停二世保伊勢守護一、立二國司家一、南方官加階如レ元、亦世保長野一黨以下亦將軍屬、國中分領相定先神領者神三郡并諸郡中其外

諸國神戸御厨等元弘建武以來武家押領之而今度會郡山田三保宇治六郷多氣郡齋宮寮飯野郡相可庄等也神領亦國司奉行也是將軍關東合戰未靜亦宮方有蜂起甚大事也天下悉大平後國司一家皆可誅伐由密思企先與領地令和親

十

○武士の神領押領の例

應仁二年十月廿八日大神宮禰宜經興雜掌、五箇景雅ノ伊勢華臺寺領菊御園ヲ押妨セルヲ停メラレシコトヲ神宮廳ニ請フ〔内宮引付〕

〔大日本史料第八篇之二〕

△文明五年八月日解狀ヲ坂内氏ニ致シ五ヶ駿河守ノ神領伊勢菊御園ヲ押妨セルヲ訴フ〔内宮引付〕

〔大日本史料第八篇之六〕。

△文明元年九月九日荒木田定治、解狀ヲ上リ、前澤某ノ押領セル内宮御領、伊勢土羽禪師御厨ヲ還付セラレンコトヲ請フ〔内宮引付け〕大日本史料

一皇太神宮神主

注進可早預御成敗全知行、專式日神役多氣郡土羽禪師御厨事

右件御厨者、爲内宮御領神宮知行無相違之處、依前澤方捍〔押カ〕領、不及神宮知行之間、神用令闕如之條、神鑑難測者哉、且神御忠、且以道御沙汰、如元被返付神官全知行、備御神饌、遂行神事者、可爲御祈禱專一者哉、仍注進如件、以解

文正〔明應〕元年九月九日 大内人——定治

禰宜從四位上荒木田神主氏經——十人被加署名

△文明元年十二月卅日荒木田定治、解狀ヲ幕府ニ上リ、\*高橋右京亮ノ神宮領藏經料所伊勢福永御厨一分ヲ押領スルヲ止メラレンコトヲ請フ。〔内宮引付け〕

氏經神十記

壁書

十一月晴八日

太神宮一切經所建國寺雜掌申

右伊勢國三重郡福永之内一分事、爲藏經料所神宮當知行之處也、若號寺領、有掠申族者、被郡〔マコ〕下可明〔亂脱カ〕申者也 公方推之

文明元年十一月日

一皇太神宮神主

注進可早被經次第御沙汰、嚴秘蒙御成敗、太神宮領内官藏經料所伊勢國福永御

厨、被停止高橋右京亮捍〔押カ〕妨、全神官知行、專御祈禱事

右件大藏經者、勝定院〔義持〕殿様有御寄進太神宮、而代々一禰宜可致奉行由蒙御〔成脱カ〕敗、安置内宮、建國寺致御祈禱者也、爰普廣院〔義教〕殿様有御建立藏殿、而被寄進福永御厨一分、無知行相違、致長日御祈禱之處、高橋右京亮成妨之條、神慮難測者也、不日蒙御成敗、全神宮知行、禰爲專御祈禱忠勤、注進如件、以解

文明元年十二月日 大内人 〔正六位上荒木田神主〕定治

禰宜從四位上荒木田神主氏經

十人被加署

御陣中寺社本主領ヲ被落、仍神官領ト勅〔ママ〕也

△文明二年六月廿一日解狀ヲ幕府ニ上リ、伊勢守護一色義直ノ押領セル南郡司職田ヲ還付セシメラレンコトヲ請フ〔内宮引付〕

大日本史料八ノ

△文明五年八月日解狀ヲ幕府ニ上リ、伊勢守護一色義直ノ同國神領南職田ヲ押領セルヲ停止センコトヲ請フ〔内宮引付〕

大日本史料八ノ

一皇太神宮神主

注進可早仕先例理運嚴密蒙御成敗、被停止守護方被菅〔官〕人妨、全神官知行、專年中數箇度神役、抽天下泰平精祈、太神宮御領河曲郡〔今河藝郡〕南職田事、

右件南職田者、爲太神宮御領、往古以來、年中數箇度神役、并年中四箇度官幣使供給役等、嚴重異于他神役料所也、然近年守護方無故被押領、因茲色々神役令懈怠、

御祈禱退轉之基、不可然之間、・・・下略

文明五年八月日

大内人

—— 定治

禰宜從三位荒木田神主

—— 從四位下 —— 十人署名

△文明三年正月別宮伊佐奈岐宮大内人久次世保政康ノ押領セル伊佐奈岐神田ヲ還附セシコトヲ神宮廳ニ請フ〔内宮引付〕

大日本史料八ノ

一目安

皇太神宮別宮伊佐奈岐宮大内人久次謹言上

欲早任先例被成連署御廳宣、太神宮御領伊勢國三重郡伊佐奈岐神田、全知行專神役勤仔細事

右件神田者、爲嚴重神領、致日野永隆隆奄取〔ママ〕沙汰之處、一色〔義直〕殿當國御成敗之時、岡田源左衛門殿令押領、致如形之上分沙汰、其後世保〔政康〕殿御成敗之時、相差羽禰、又如形致沙汰之條、神慮難測者、然早任先例理運、被成連署御廳宣、如元被返付、全知行專神役、爲致御祈禱、謹言上如件

文明三年正月十〔ママ〕

△宮廳、深田御厨ヲシテ、棚橋被官人ノ押妨ヲ退ケ神供ヲ全セシム〔内宮引付〕

応仁三年二月十五日〔大日本史料八ノ〕

廳宣を省略す。

△文明四年十月十日内宮領魚見〔伊勢飯南郡〕御厨押領停止の目安、廳宣、内宮引付

△文明五年伊佐奈岐神田全知行の目安廳宣

内宮引付

一目安

皇太神宮別宮伊佐奈岐宮大内人久次謹言上

欲早任先例被成連署御廳宣、太神宮御領伊勢國三重郡伊佐奈岐神田、全知行專神役勤仔細事

右件神田者、爲嚴重神領、迄一色成就院殿御代者、無相違爲日野永隆庵代官執沙汰之處、當一色〔義直〕殿國御成敗、自康正年中岡田源左衛門尉令押領、上分許致沙汰、其後世保〔政康〕殿御代官者相差羽禰〔ママ〕、又上分許致沙汰之間、年中諸神役

令闕如條、神慮叵測之由、多氣殿様國  
御成敗之刻、以連署御廳宣依被歎申、被返付神宮處、當職岩内様不預御成敗之條、  
諸役人等愁訴此事也、然早重而被成廳宣、以當職御成敗、全知行專神役、爲致御祈  
禱精誠、俊重謹言上如件

文明五年七月日

十一

○上分滞納の例

△應仁二年神宮廳内宮子良神田の滞租を催徴せしむ(内宮引付)

一廳宣

可早任先例本員數致催促沙汰内宮子良神田小岐田五反上分當年分夏

右件神田者、自往古每年上分無懈怠之處處(衍カ)、迄當年及八ヶ年無沙汰之條、神  
慮難測者哉、然早任先例本數遂究濟徵納、可令勤仕式日神役之狀、所宣如件、以宣

應仁二年十一月十六日

禰宜荒木田神主十人判

△文明七年初倉貞義をして、神宮領三河神戸地頭職の神役を納入せしむ

(内宮引付)

廳宣

可早任先例、本員數致神役勤太神宮御領三河神戸事

右件神戸者、爲太神宮御領、年中勤役繁多也、然近年依神稅無沙汰、神事令闕如之  
條、天下御祈禱退轉、甚以不可然、神慮難測者哉、然早任本知行之旨、沙汰付全  
領知、備每年數多神役、可遂行式日神事之狀、所宣如件、以宣

文明七年二月 同八年十月一日成

禰宜荒木田神主判

十人加判催役(促カ)廳宣

親元日記別錄

神主領遠州濱名神戸代官職事、堀江小猿丸方江以被官藤波伊賀守申合候、文明三年〃  
借物拾餘貫文致口入、年貢數十貫文乍押取、抑留借書、拘措代官職也

△文明五年安濃郡松本御厨及び撰津國分寺御厨に上分米を督徴

(内宮引付)

一廳宣

可早任先例本員數、致催促沙汰安濃郡松本御厨本宮口入上分米事

右件御厨每年口入之上分米事、自往古于今無懈怠御神稅也、爰去文明二年國方御發  
向長野之刻、：爲軍勢件神田等號被蒞田、神稅不致其沙汰、自其以來、寄事於左

右、令無沙汰之條、神鑑難測者哉、然早任先例本數遂究濟徵納、可令勤仕式日神役  
之狀、所宣如件、以宣、

文明五年八月十一日

禰宜荒木田神主判 十人判

△永正八年上野青柳御厨に神用年貢未進を催促

内宮引付

一廳宣

可早任先例本員數致催促沙汰宮領上野國青柳（勢多郡）神用年貢事、右件御神領青柳者、當祭主本領、而自往古每年御神事役所無相違之處、近年米倒（未到カ）之間、祭主代官分度々雖申下事子細、猶以無沙汰、神慮太叵測、早前々未進以下、當年貢嚴重可令勤仕神役之狀、所宣如件、以宣

永正八年八月日

禰宜荒木田神主

此類の未進極めて多、一つの例であるが、一々列挙せず。

十二

○神領に対する武士課税の例

△寛正年中日記

一廳宣

可早任先例被止新儀課役催促美濃國中河御厨事

右當御厨者爲嚴重太神宮御領自往古守護不入之處近年被相懸新儀之課役除當年德錢以下被致譴責之間及數度致其沙汰畢仍有限神役之沙汰不可叶之百姓難申之間致注進嚴重雖被成下御奉書押留御遵行刺重被段錢之条以外次第也早速被經返彼德錢自今以後可被停止臨時之課役若御成敗及遲怠者押止神事可難申

公方様者也仍所宣如件以宣

寛正四年九月日

禰宜荒木田神主判 十人加判

△文明八年十一月廿五日廳宣ヲ伊勢守護代某二下シ神宮領ニ半濟ヲ課スルヲ停メンコトヲ求ム、

（内宮引付） 大日本史料

一廳宣

可早任先例、被止武家御綺、致催促沙汰當國諸太神宮御領上分并諸神稅事

右件當國諸太神宮御領毎年稅上分等者、爲兩宮年中御饌料米、嚴重異于他御神物

也、然當年自守誰（護カ）御方、可被半濟被入御使之條、前代未聞之仔細、神鑑難測

者哉、然者御饌令闕如、天下御祈禱可退轉轉之條、甚以不可然、速被止御綺、諸神

役任本員數、遂究濟徵納分（令カ）勤仕式日神役、可專御祈禱之狀、所宣如件、以

宣、

文明八年十一月廿五日

禰宜荒木田神主判十人

十三

○武士の神稅押留の例

△親元日記別錄

（請和泉守入道常通）

請泉州（藤原秀忠）

一祭主三位雜掌申・・（文明）七四廿四

神宮領遠州濱名神戶代官職事堀江小猿丸方江以被官藤波伊賀守申合候文明三年ニ借物拾餘貫文致口入年貢數十貫文乍押取、抑留借書、拘惜代官職也



△氏保、島取莊代官ノ恣ニ其租ヲ占得スルヲ幕府ニ訴フ 大日本史料  
親元日記別錄 中 沿河州（治部國通）造宮使雜掌權禰宜氏保 文明六・三・十  
神宮領泉州鳥取庄兩代官契約事、一方庄主者引諸庄立用以定得米内引分一畢、一方矢  
野八郎細河殿御内以總高頭可引分一之内申候無謂云々

十四

○上分貢租を外方より分ち取る例  
△楠原御厨上分米ヲ他方へ分遣ノ事  
内宮引付（文明六年） 大日本史料  
楠原御厨上分米之支、自往古以來、爲内宮御上分無煩候之處、他之方江被分遣候之  
條、神慮難測候、任先例理運、本員數御沙汰候者、神之御忠可爲御祈禱專一候哉、  
恐々謹言

十月廿九日

氏經判

賀太伊賀守殿御宿所

内宮一禰宜

法泉寺領片淵賀太知行、仍近年山田妙藏寺江三分一遣堅申候間、一禰宜在狀者可沙汰由、  
間五郎兵衛所望仍遣

△文明之氏經、内宮領小林御厨上分

内宮引付

△文明之氏經、内宮領小林御厨上分ヲ指取館ニ分納スルヲ止メラレシコトヲ請フ

内宮引付

一爲御祈禱千度御祓太麻箱一合進上仕候、兼又小社御厨者、爲内宮領毎年上分無懈  
怠候處、去年依御成敗指取館少之納取候、神慮難測候、仍式日神事御祈禱退轉  
轉、太以不可然候處、當年又致催促候之條、以外子細、彼被止催促候者、可爲御  
祈禱專一候由、可在御披露候、恐々謹言

十二月七日

氏經判

進上 御奉行所

内宮一禰宜氏經

同日同様のものを小社政所宛に出してゐる。

十五

○陸路交通妨害による上分不能の例  
△文明七年氏經、書ヲ木曾家豐、齊藤妙椿ニ遣リ、神宮領信濃仁科御厨ノ神役通行ヲ  
押留セザランコトヲ求ム、

外宮引付

一御祈禱千度御祓太麻一合進入仕候、猶々於（脱アラン）神前參宮人不叶候之由其  
聞候、殊又毎年信州自在々所々徵納候御神役等、依前々路次相違、一兩年新海道  
上下以外大儀候、仍仁科御厨御神役者、兩年不到來候、旁以神慮不可然候、所詮  
以御神忠之儀被開、當年神宮使其方可罷越候、返々無爲御成敗可得御意候由、可  
有御披露候、恐々謹言

六月廿六日

内宮一禰宜氏經判

進上 木曾殿

御奉行

同日付齊藤妙椿への書狀は畧す。

同七月八日、木曾家豊よりの返書あり。

「於以後も參官人諸商人等事、開路次堅無爲可致成敗候」の趣である。

○海上交通に於ける上分濫妨の例

一廳宣

可早致徴納本宮上分米五石被押留泊浦（志摩志摩郡）、神饌闕如、神慮難測者哉、急速被返渡、專神用間事、

右件上分米五石、令積神社大郎四郎之船之處、被押留泊浦云々、雖有被船子細、於上分米者、何被押乎、令神饌闕怠之條、神鑑恐不少者哉、速被返渡、可令勤仕神役之狀、所宣如件、以宣、

文明四年十一月十三日

禰宜荒木田神主判

判九人判、八經房 被他行

△文明四年船上の上分米押取を停め之を徴納せしむ（内宮引付）

一廳宣

可早致徴納奉備御饌太神宮上分米等事、

右件御上分米者、遂徴納奉備御饌者也、爰内宮上分卅八石、令積白子道賢兵衛之船之處、若松江（伊勢河藝郡）無故被取終畢、仍神供令闕如之條、神慮難測者也、然早嚴密預御成敗、遂徴納、可令勤仕神役之狀、所宣如件、以宣、

文明四年十一月廿五日

禰宜荒木田神主判 十人判

△文明八年尾張幡頭崎に於て志摩石鏡浦の神船押領を停め之を返付せしむ（内宮引付）

一廳宣

可早被返付専毎年神役、本官神船志摩國石鏡小新藏荷物併船具足以下事

右件船者、爲本宮神船令頂戴廳宣令勤神役之處、彼船舊冬隨便風下向之處、號過失、於幡頭崎荷物併船具等以下被押取云々、然間以廳宣押船之儀雖申之、無御承引之由注進之條、神慮難測之者也、然早彼如注文荷物併船具足以下被返付者、可爲神忠第一之者也、無其儀者、可令神役退轉之條、殊神慮不可然之間、任神宮之法、可致其沙汰之者哉、仍廳宣之狀如件、以宣、

文明八年四月日

禰宜荒木田神主判

九人判、三永量缺示、仍無判

△文明八年氏經書を相差能景に遺り、兩宮上分米を抑留せるを返付せんことを求む（外宮引付）

大日本史料八篇

一太神宮御饌米之上分等被召置候之條、驚入候、舟之公事候へハとて上分を被召候事、併御神敵之儀候哉、速返給候ハ、可喜入候、不然者御饌令闕如、天下御祈禱之神事可退轉候之條、無勿躰候、仍任神宮之法、可奉向御禰候へ共、先爲得御意令申候、無相違候者、目出可喜入候、且又可爲御祈禱候、神宮一同此由令申候、委細者使僧可申候恐々謹

言、

十二月廿七日

(荒木田) 氏經判

相差殿

此件に関し、文明九年四月廳宣、同五月十日氏經より相差への書状あり。今ハ畧す。

△文明五年伊勢諸湊に令し、神用船舶に新に警固等の役を科するを停止せしむ。

(内宮引付)

大日本史料八篇

一廳宣

可早任先例伊勢海小廻船事、被止諸湊新警固往返間事

右件御船舶者、往昔以來被定置諸湊之諸役外、於今有新儀課役由云々、然者可及御供用闕如哉、叵測神慮之至者也、早如先例被止諸湊新警固者、并可爲御祈禱專

一者也、仍所宣狀如件、以宣、

文明五年六月日 件廳宣船舶字ヲ畧テ、北廻船役ト載テ三通

禰宜度會神主

同六年四月三日成以前外、又新警固所々遣云々

新警固所々事

依舊冬廳宣、安濃津警固被停止喜入由、長野江狀遣、

矢野浦(伊勢一実郡) 本一、今二加之

安濃津(安濃郡) 若松浦(河藝郡)

北永江

四箇市庭浦(一志郡)

用福浦

今答志浦(志摩答志郡)

内宮よりも同様の廳宣あり。畧之。

△廳宣を下し船舶への課役を停止せしむる例の條項のみを左に列舉せば次の如くである。

1. 文明五年九月廿六日太神宮御穀船日吉丸に諸浦の課役するを停止せしむ(内宮)

2. 文明六年三月廿九日太神宮御穀米神社船二郎丸に諸浦湊の非常課役するを停止

せしむ(内宮廳宣)

3. 文明六年八月太神宮御穀米神社船寶丸に諸浦湊の非常課役するを停止せしむ

(内宮)

4. 文明八年八月廿九日同様太神宮領國崎(志摩) 船國一丸に関するもの(内宮)

△神役船舶に違乱あるべからざる事の廳宣の例

一廳宣

可早任先例、令勤仕毎年神役新船舶伊志賀小新藏事

右件伊志賀小新藏事、爲船舶毎年無懈怠可令神役者也、然間海上並浦々津々泊々、爲不可有其之煩之狀、所宣如件、以宣

文明七年八月日

禰宜荒木田神主判 八人加判、二經興ハ中風氣、七守則ハ灸穢、依外ニ朝厚所望成之

○荒木田守則等同神主等の同宮領伊勢南職田を押量するを停止せられんことを請ふ。

(内宮禰宜荒木田守晨引付) 上

皇太神宮神主

注進、可早任先例理運、蒙御成敗、全知行、專年中數ヶ度神役、抽御祈禱、太

神宮御領河曲郡南職田事

右件南職田者、年中四ヶ度官幣使供給役嚴重異于他神役料所也、然近年神主方無故、依押領、色々之神役退轉之基、神慮難測者哉、早任先例理運、蒙御成敗、遂神宮、徵納、專神役之勤、致御祈禱者、御神忠何事加之矣、仍注進如件、以解

永正五年九月日

大内人——

禰宜從四位(正五懸)下荒木田神主守則

以下合七人

神宮に対する  
課役

○文明十一年神宮傳奏廣橋兼顯神宮御倉酒屋仁造酒正役を督促す。神宮禰宜等解狀を上り、之を愁訴す。晴富宿禰記

三月六日、癸亥、晴、大神宮造營用脚預置御倉課役事、小原松壽丸酒屋公事免除之次第等有申旨之間、遺書狀於藤波而相尋、一兩日中可參申之由、返報到來、

七日、甲子、晴、藤波來、神宮御倉諸役免除之奉書、長祿以來、武家奉書兩度也、去年八月又彼下綸旨、然酒屋課役、半分廣橋知行、半分造酒正知行也、元來御倉不致所役之處、今被懸之、奉書事者、非公家之支證、於綸旨者、去年掠賜上者、不可爲支證之由、傳奏廣橋中納言兼顯卿頻陸梁之間、力不及迷惑之由、藤波來申之、

四月二日、戊子、自朝雨降、祭主二位秀忠卿使藤波來、神宮御倉酒屋五條東洞院小原松壽丸、造酒正役、自廣橋黃門傳奏兼顯卿及催促、此在所諸役免除也、近者長祿武家奉書、去年八月綸旨有之、古證文等者、此一亂中令紛失云々、然去年綸旨事者、掠申敷不及承引、元來此支證無之者、酒(造脱力)正役可譴責云々仍自兩宮禰宜等、以連署請印之解狀敷申之間、祭主卿執奏藤浪(波)持來、官務放上文了、

太神宮御倉小原松壽丸謹言上

右在所ハ往古よりの所役をいたさず、志かるに近代權門勢家をいわず公役をかけらるゝによりて、此神宮御倉にいらんなからんため、公方奉書を成下させ、去年はかたしけなく綸旨をちやうたい仕了、雖然いま造酒正の課役御催促にあつかる條、めいわくの次第也、公武御成敗を成下さるゝハ何ためそや、神宮の御ため甚敷存、所詮(詮)酒正の御公事、其さいそくを可停止之由、御成敗を仰たてまつり、神役をまたうせんかため、粗謹言上如件、

文明十一年三月日

十八

○神宮法の例

△文明九年相差能景の南宮上分米を抑留せるを返付せんことを求む廳宣

(外宮引付)

廳宣

可早任員數致辯沙汰大神宮御饌米上分事

右件上分者、爲大神宮御饌米、自諸御厨令徵納、奉送本宮之處、號有過彼船、無故抑留上分之條、神鑑在恐者哉、因茲御饌令懈怠、御祈禱神事令退轉之條、天下御慎、神宮重事也、速被返渡彼上分米、備御饌遂行神事、可致天下御祈禱若猶不被返備者、任神宮法、看向兩宮御神木、可令蒔神灰之狀、所宣如件、以宣

文明九年四月 日

禰宜荒木田神主判

△文明八年伊勢守護代某の大神宮領に半濟を課するに對する神宮の態度、

〔内宮引付〕

當國諸太神宮御領可被半濟被入御使候條驚存候、仍任**神宮法**、奉向御神木或連署之  
廳宣候、子細載廳宣候、速被止御綺候歟、可爲御祈禱之專一候恐々謹言

十一月廿五日

氏經判

内宮一禰宣

守護代殿

依件事、自兩宮**榊持黃衣**六十人可被越、無承引者、國人立勢、御榊ヲ前立、守護代  
ヲ可追立之由、自藤波方在狀、出國之雜用彼方ニ可有曲也、仍宮使四人遣、但一人  
自三禰宣、路錢各三百宛下行、自外宮々々下人四人、内宮依(無脱カ)人外宮ハ大勢可  
被遣之由雖申、任内宮人數四人、廿六日進發處、早落居畢、其狀備

當國御神領所候事、任御下知、如先例令停止違亂之狀如件

文明八

十一月廿七日

郷實判

藤波美濃守殿雖然大署(略)押取事

十九

○享徳元年廳宣注文に據る(神宮文庫)

伊勢國渡會郡	二二所	多氣郡	一一	飯野郡	九	一志郡	一一	飯高郡	一六		
安濃郡	一二	奄藝郡	一一	鈴鹿郡	一六	河曲郡	一七	桑名郡	七		
三重郡	一五	朝明郡	一四	員弁郡	二一						
三河國	六所	遠江國	一一所	駿河國	二	相模國	一	伊豆國	一	武藏國	三
美濃國	七	尾張國	一八	伊賀國	四	能登國	二	播磨國	一	丹波國	三
若狹國	一	備前國	一	長門國	一						

以上合計 伊勢 一八一ヶ所 諸國二五國 六二ヶ所

神宮綱要其他の計算に合致せざるも、今ハ自からの計算に従ふものとす。

廿

○大永廳宣(大永六年九月十一日書之) 神宮文庫本

これによつて国別に分類すれば次の如し

伊勢國	六〇ヶ所	伊賀國	四	三河國	四	遠江國	七	尾張國	七	美濃國	
四											

合計八六ヶ所

○天文廳宣に據る(神宮文庫所藏)

天文廳宣

廿一	これも一般と	小方小三郎代官江の分	十四枚	天文四年六月六日							
	ニヶ所の誤差	平田鈴鹿人	長澤河曲人	遠保芝田三重人	山下野尻鈴鹿人	与元鈴鹿人	庄野鈴鹿人				
	を生ずるも、	越智奄藝人	野日河曲人	大古曾奄藝人	一身田奄藝人	松崎河曲人	荒倉安濃人				
	これによる	草生安濃人	得田奄藝人	十四ヶ所							
	十四ヶ所										

札の分 小三郎代官

潤田三重人 石樽員弁人 饗庭員弁人 丹生河員弁人 長深員弁人 出納取朝明人  
下野 三重人 飽良可三重人 大強原三重人 宇賀員弁人 長松 保の朝明人  
治田員弁人 田口朝明人 大田員弁人 長藤朝明人 大泉員弁人 大井田員弁人  
小嶋朝明人 志礼石員弁人 十九枚

廿ヶ所 近代尾州三通

三ヶ所 一柳 立石 連臺

三ヶ所 伊賀近代二通

二ヶ所 多良 上津江

阿乃田 若松 小森 莫太 高松 莫太御鮎 采女 鮪地 金総 智積 書生  
右記十一ヶ処ハ 伊勢国内の神領である。(享祿・大永廳宣に見ゆ)

美濃三通

三ヶ処 中川 雜木 開発

三河國三通

三ヶ処 大津 高松 川内

合計五国五六ヶ処

廳宣

可早任先例本員數致催促沙汰朝明郡儀

御厨本宮上分當年分事

右件御厨毎年本宮御上分米事任先例本數遂究濟徵納可令勤仕式日神役狀所宣如件  
以宣

天文五年拾月 日

禰宜荒木田神主

廿二

○出納所神領引付(神領給人引付)に據る(神宮文庫)

神領給人引付 外宮出納所

合

… … … …

右注進如件

延元四年十月 日 但政所太夫注進定也

… … … …

本云

永正四年三月七日書畢

今は國別分けを畧す

廿三

○「外宮神税上分帳(\*今明記を失へり)」中の左の記より推測す(神宮文庫)

廳宣

可早任先例致催促沙汰令勤仕神役

外宮御領安濃郡内田御厨當年上分間支

右件御厨者往古以來爲嚴重神税在所者也然早任先視本員數遂究濟徵納可令專式日

神役勒狀依所宣如件以宣

禰宜度会神主

||||||

- 一、桑名郡の内 猪飼 小山 富津
  - 一、員弁郡ハ 饗庭 治田 平塚 高柳 梅戸 長深
  - 一、朝明郡 保々 岩田御園
  - 一、三重郡 大強原 知積 川嶋 山田 曾井 長松 日永 川尻 采女 松
- 本是ハナシ

- 一、河曲郡 箕田 林崎 柳新御厨
- 一、鈴鹿郡 原庄
- 一、安藝郡 黒田 得田 太古曾
- 一、安濃郡 卯杖 饗敷 唇口 衆倉
- 一、一志郡 御館
- 一、志摩國 賀茂
- 一、美濃國 中川 麴米在々所々
- 一、近江國 福長
- 一、遠江國 濱松新厨
- 一、摂津國 江守(尋)中村新厨

從本宮御出乃時宮司ノ告刀宮司御改(譯文)御讀也

度會乃山田原乃下津岩根仁宮柱廣敷立天高天原仁千木高知天皇御麻乃命僞辭定奉留豊受乃皇太神乃廣前仁恐美恐美毛申給波久新宮仁奉移渡留狀於平久安久令知食止申給止申

永祿六年九月廿三日

之ハ外宮正遷宮復興の時のものと思はれるが、神領目録ハ此の祝詞の直前に記載されてゐるので、素直に考へれば、此の頃のものと思はれる。

註一

第三節 造替の停滞

延喜式卷第四、神祇四

伊勢太神宮

凡太神宮。廿年一度造替正殿寶殿及外幣殿一度會宮。及別宮餘社。造<sub>二</sub>神殿<sub>一</sub>之年限准<sub>レ</sub>此。皆採<sub>二</sub>新材<sub>一</sub>構造。……

其使供給充<sub>二</sub>用神稅<sub>一</sub>。丁匠役封戸人夫糧食。使用<sub>二</sub>神稅<sub>一</sub>。若神稅不<sub>レ</sub>足用<sub>二</sub>正稅<sub>一</sub>。自餘諸社宮司修理

其他一般の規定は主として神社協会雜誌第二十八年第二号

「神宮式年造替の制限に関する概括的考察」小林巖雄氏に参照した。

二 寛正三年造内宮記(神宮遷宮記第四卷)

文安二年八月廿二日 宣旨

正四位下行神祇權大副大中臣宗直朝臣

宣<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>造伊勢太神宮使<sub>一</sub>

三

○役夫工米催促の例

△蔭涼軒日録長祿四年七月九日條

九日 役夫工米之事、於「諸五山」督之

△同 寛正二年十一月六日條

役夫工米諸寺院怠慢、限「此十五日以前」可致「其沙汰」・・・

△同 寛正三年十一月廿五日條

四

○役夫工米免除の例

△蔭涼軒日録長祿四年六月十八日條

寶林寺領備前新田莊内吉永保、并赤松次郎法師知行分、新田莊役工米、以「先規支證」可「有」御免「之由被」仰出、「仍命」神宮奉行飯尾加賀守「也」

△同 寛正三年六月十四日條

南禪寺領、賀州洪水并遠州忽劇之間、就「役工米可」被「用捨」之嘆、并三會院臨川寺江州山訴可「被」止「違乱」之御奉書之「上伺」之、命「各所寺奉行」也、不壞化身院々務之「夏」、就「雜掌理運可」被「成御奉書」之事「上被」仰「付寺奉行治部河内守」也

△大乘院寺社雜事記

寛正二年九月廿四日條

一就河口反錢事御教書「夏」仰上、早々可申沙汰云々、近日爲伊勢造營反錢、奉行可下向越前云々、於寺社領者可有御免也

同年九月廿九日條

次役夫工米事、於南都領者除之云々

五・四

○長祿三年八月廿一日太神宮造營を京都新關に求む。碧山日録、長祿三年九月七日條七日丙戌 近歲諸州路、國俗之強豪者、置關以征之、往來悉難焉、相公命諸吏而破之、因爲改造伊勢之大廟、於安城之七路自諸州入京之路其數七也、前月廿一日、各置一關征之而已、往來咸喜此也、俗子貞信來語之

○長祿二年三月廿八日 地口錢を五山に課す。

蔭涼軒日録 長祿二年三月廿八日條

造内宮料地口錢。於「諸五山」各可「出」廿貫文、「於」諸塔頭「各三貫文可」出「之、此旨可」相觸「之由被」仰出「也」

六

寛正三年造内宮記

上卿 万里小路大納言

寛正二年九月五日

從三位行神祇權大副大中臣朝臣秀口忠、安永本

宣爲「造伊勢太神宮使」

藏人頭左中將兼伊勢權守藤原宣胤奉



七 ○寛正正遷宮に於ける遷宮の儀式は  
神宮遷宮紀第四卷、寛正三年造内宮記の寛正三年十二月廿七日條に詳しく見ゆ。今は載せず。

八 ○1、應仁元年三月日皇太神宮神主の解狀（内宮引付）  
右大神宮造替遷宮者、天下大營神宮大事也、爰自去永享三年遷宮經卅二ヶ年、去寛正三年雖被奉成遷御、及當年六ヶ年、諸殿舎諸別宮、攝社、末社等之事、曾不及御沙汰、仍諸別宮者悉令顛倒……  
2、應仁二年三月日皇太神宮解狀（内宮引付）  
一當宮諸殿舎悉令退轉、諸別宮、攝社、末社悉令顛倒給、神牀皆御坐地上之條……

3、文明元年九月日皇太神宮神主解狀（内宮引付）  
一當宮諸殿舎并諸別宮悉令顛倒……

九 ○1、應仁二年三月日皇太神宮解狀

去寛正三年、當宮御遷宮之時、第一御裝束屋形文錦御被御文相違、其外御裝束御神寶等相違繁多也……

2、文明元年九月の皇太神宮解狀

一去寛正三年當宮遷宮時、御裝束御神寶御金物不足僞惡違失、非違言上、御裝束五十四種中、屋形文錦御被者、第一御衣、其故異于他御裝束也、御文相違在恐、織直可被奉飭替事。

3、應仁三年三月廿二日内宮一禰宜雜掌直行言上の目安にも見えるが省略す。

十 寛正三年造内宮記に據る。

十一 氏經神事記

寛正四年潤之月一日條

同日、正殿古殿奉壞之刻令顛倒給、奉打折心御柱希代之珍事也、古殿事大方三ヶ年被置之例也、但翌年奉撤例度々也、爰當殿柱根令朽損傾危以外也、令顛倒給事非偶然者、心御柱有顛倒怖畏、仍任例頭工小工等ニ被下行食物沙汰之處、其不拵支度致沙汰楚忽儀也……

○1、應仁二年三月皇太神宮神主の解狀（内宮引付）

又古宮所心御柱令顛倒給之條天下表事也……

2、應仁三年三月内宮一禰宜雜掌直行謹言上の目安

又同六月（寛正四年）ニ、當宮古殿令顛倒、心御柱を打折畢、抑本宮新宮心御柱ハ、天下の守りにて、御かさりいさゝかも相違出來時ハ、かりとのを被行、夜を日につき被奉直例なり、すてにおれまします條、天下の表事たる間……

3、文明元年九月の皇太神宮神主の上れる解狀

一東（當）宮所心御柱顛倒御之（文）條重事也、兩所心御柱者、守天下治國灵威御（脱字カ）也不被立者、爭天下治乎、急可被奉立事

○氏經神事記大神宮叢書神宮年中行事大成前編

寛正五年九月十七日條

玉串奉納之後、公方御代官吉見太郎、一色太郎兩人彼自被官人中喧嘩出來、於御階東際令刃傷雜人、其血東方南角ヨリ第二ノ大床柱四方白石北御門下闕ニ及・・・是併屋形文錦御被心御柱顛倒之重事等、被行假殿遷宮可被奉直之處、及御沙汰豫儀之條神慮不快之儀令顯然者哉・・・

抑件血ノ奉汚大床ノ柱ハ、則當宮エ當時宮ノ預奉行大夫二郎急奉拭、北御門下闕ニ付血ヲハ削之、白石ヲ取退畢、雖然念劇刻夜陰之沙汰、血氣ノ相殘所モ在敷之間、十八日早旦家子禰宜權任目代被官ヲ相具、内院ニ參、血氣ノ相殘白石若干之間掘退、新キ白石ヲ奉置替畢

○1、内宮神官所持古文書

造内定(宮)料關東御分國役夫工米夏、被相副事書訖、早被相懸之、可究濟之旨、可有御下知趣、可被申沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件

文明三年三月廿七日

朝日信濃守殿

2、御内書符案

(伊勢兵庫助貞宗) 兵奉

造内宮料關東國々役者(夫カ)工米事、相副事書訖、嚴密可究濟之旨、可被下知之狀如件

六月十二日(文明三年)

御諱(義政) 御判

佐兵衛督(足利政知) 殿

3、内宮引付

一造内宮料關東分國役夫工米夏、先度成内書之處、于今不更行云々、太不可然、所詮相觸之、嚴密可究濟之旨、可被加下知之狀如件

六月廿九日(文明五年)

佐兵衛督殿

造内宮料關東御分國役夫工米夏、去々年被成御教書之處、于今不更行云々、不可然、早被相懸之、可究濟之旨、可有御下知之趣、可被申沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件

文明五年七月二日

河内(治部國通) 前司在判

修理(撰津) 大夫在判

朝日信濃守殿

(修理大夫) 一之親

同様のもの布施佐渡守、長尾禪正左衛門尉、太田備中入道(資持)宛に出されてゐる。

## 1、○皇代記附年代記

同(文明)十八年十二月廿日、多氣殿(国司北畠)ヨリ山田御發向、件子細者、岡本三立番屋、參宮貴賤不通之間、國司様可預御裁許之由申之間、御退治也、同廿二日、早旦板倉掃部助武則御殿奉點(懸カ)火、腹ヲ切ル、仍兩宮卅日穢也、外宮御炎上事、内一氏經卿聞之、愁歎不斜、存命口惜由ヲ被申、自當日及病氣、同十九年正月十二日、氏經逝去也、取神宮器而愁歎可有之者也

## 2、○延徳以來内宮注進狀

山田没落

一文明十八年丙午十二月廿日、山田没落之事、于岡本立番屋、而參宮貴賤、一向不通内宮宿之間、山田江再三雖申子細、不致承引也、折節多氣殿有參宮之間、可預裁許之由依訴申、雖仰付其謂於山田、不致承引剩榎倉掃部助武則種々致緩怠之間、有御退治、山田三方悉放火、榎倉一類籠御殿、同廿二日早天切出而皆打死也、掃部助引返、懸火於御殿而切腹畢、其外數百人打死之間、其穢依及兩宮、共三十日觸穢也、然間翌年正月朔日御饌、七日、十五日神事悉延引矣、於外宮御事者不及申也

## △伊勢遷宮次第記

文明十八年丙午十二月廿四日、外宮假殿遷宮古殿舊記曰、文明十八年十二月廿日、國司與宇治一黨而攻山田、合戰數度山田悉燒亡、廿二日、午刻山田住人村山武則(註略)、放火於正殿而切腹畢、自正殿良方十間許退立而自害・・・

## △外宮子良館記

文明十八年ひのへ馬のとし十二月廿日、宇治と國司と一所になり候て、國司おくだき候、され共ゆみやハ山田よく候て國司がたの人を七八百人うちとりそろ。かみの城に國司方の人數こもり居申候あひだ、二三度かつき候へ共、其日はをちず候間、宮山にたまらず候てをち候。榎倉の人數計御殿の御下に八人籠候て、敵を待居候處に、宇治衆此由聞候て、甲五百計にてよせ、又軍勢ものほせ候て、取籠候を宇治衆を一円にきりとをしまでおっこし候て、やがて御殿へ火をかけて掃部腹をきり申候、殘七人はやがて敵をおひかけ候て、かみの我城へ打入候、敵をも打我もやかてみなうたれ候、是は十二月廿二日なり云々

## ○親長卿記

文明十九年正月二日、今日聞<sub>ニ</sub>伊勢外宮正殿燒失<sub>ニ</sub>子細可尋云々、後聞於<sub>ニ</sub>神殿内陣<sub>一</sub>軍勢籠切腹數人云々、其後懸<sub>レ</sub>火、先代未聞事也

## ○續應仁後記卷三、大神宮炎上一揆亂事

「天文三年甲午ノ春」とあるがこれハ誤りである。

一族ノ棟梁村山掃部助大神宮ノ社中へ逃入り拝殿ニ腰ヲ掛テ腹切テ失ヌ、淺猿ト云モ猶餘レリ、剩火ヲ放カケテ遂ニ當社一片ノ煙ト燒失ス、寔ニ此村山ハ希代ノ惡人極罪ノ匹夫ナリ

○此外續羣書類從第壹輯下神祇部卷第十九「外宮子良館舊記」の最初の

一文明十八年十二月兵亂之記付觸穢

同じく卷第十九「内宮子良館記」にも詳しい。

○大乘院寺社雜事記長享三年六月廿六日條

一去廿二日大神宮内宮宇智郷、悉以自山田郷燒拂之、宇智者三十餘打死、神殿相殘計也、至神馬等悉以燒失了、先代未聞儀、以外次第、仍内宮三十个日穢云々、仍山田事、自國司可進發坎之由、色々及評定云々、毎々宇智與山田不和也、并日此より及合戰尔下(外)宮止内宮、如此成下、猶以天下凶事也、可歎云々

○延徳引付

宇治没落一延徳元己酉六月廿二日、山田ヨリ宇治上西郷悉放火子細、山田之一亂、偏宇治衆依詔、國方(主方)ヨリ御退治間、含其意趣、今度宇治發向スル、然間宮中死人多、仍卅ヶ日觸穢、但外宮七ヶ日穢云々、不審、同九月十三日皆還任、然間當祭諸神事、役人大略他所有間、如形執行申者也

内宮子良館記 續羣書類從卷第十九

一、長享三年九月御祭日記 但依宇治一亂、如形執行

前畧

一長官傍宮物忌衆ハ今度大亂能々加思案ニ、先年外宮御殿炎上アル間、内宮御夏モ心モトナク存間、宮中ニ**禊**候申。御殿ニ火懸ル御夏アラバ、御神躰ヲモ抱キ出シ可奉覺悟ニテ、弓矢ハジマルヨリ御前ニ祈念致ス處ニ、案ノ内ニ所々火煙目ヲ驚カス、既上館御廐子良館マデ煙上ル間、御殿ニカゝル炎ヲバ、秋ノ本葉ノ嵐ニ散ガ如也。禰宜物忌ハ氣ヲ失テアル處ニ、落合口御山タウゲノ手ヲイ數十人、其外館ニノコル年寄足弱ナド、悉瑞離ヲ破テ御殿ヘニゲ入、如今ハ御殿不浄ニ可及由申テ、堅禁制スルト云ヘドモ不用、上ヲ下ニ重キル間、不及了簡ノ計畧ヲメグラシ、敵近付間、禰宜役人モ不可叶迎、皆々宮中ヲ走出、其外ノ者モ又御山ノ繁ミヘ身ヲ隠ス、其時御殿ニ立歸テ見奉ルニ炎ヲモ不殘殘ズ、御厨モ御煩ナシ、誠以神慮ノイタリ難有存處・・・

○長享元年四月十九日、豐受大神宮燒亡に依り神祇權大副吉田兼俱をして、御神體の有無を検知せしめられんとす。是日神宮傳奏柳原資綱を召して御諮問あらせらる(御湯殿日記、十輪院内府記、親長卿記、東山文庫記録)と史料綜覽第八にあるが、「御湯殿の上の日記」には外宮燒亡の記以外にはない。その他のものは未だ一見を了してゐない。

○豐受大神宮燒亡に依り廢朝宣下の事

長享元年五月廿一

「親長卿記」 文明十九年正月十三日

同 四月十九日

同 四月廿日

同 四月廿一日

同 廿二日

「親長御記」 文明十九年四月廿八日

後法興院記 文明十九年五月廿一日

長興記 同日 各條

○長享に改元(文明十九年七月廿日)の事、外宮の炎上が直接の動機である事の史料が見當らぬが、前後の事情から考へて、かく判断される。

十七

○雜事記 長享二、一、廿三條 幕府、北畠政郷ヲ問責スル四ヶ條ノ最後  
一去々年下(外)宮燒失事、國司所行旨被仰下事、此事内宮宇治卜下宮山田卜相論確  
執事在之、自内宮沙汰也、於國司内宮方合力ハ勿論候、更以非私所行之由申入之

十八

續羣書類從卷第二十二 神祇部廿二

延德記

一密奏神異事 略す。

十九

大乘院寺社雜事記

文明十九年七月十八日條

一天照大神者丹後久世戸ニ飛給之由衆人申之

廿五日條

一伊勢國司山田下(外)宮發向事、廿四日廿八日兩人勢共押寄云々、天照大神ハ丹後之  
久世戸ニ渡給之由、一夫申之云々、不思儀(譏事也)

廿

○延德二年正月皇太神宮神主解狀(延德以來内宮注進狀、延德記)

爰去寛正四年潤六月一日、古宮所之心御柱令顛倒給事爲天下表事之由……

又云長享三年六月廿二日宇治一亂以來御神躰御坐所之心御柱退轉之義、天下重事、  
神宮之珍事也、件御柱者、守天下治國家灵威也、云彼云是、於當代者、速被遂行造  
替、奉成迂御者天下之静謐不可有疑者也

廿一

○延德三年九月皇太神宮神主解狀(延德以來内宮注進狀)

右當宮依造替迂宮遲々、御殿令傾倚及顛倒(倒)、言語道断次第也、爰去十七日、  
神嘗祭之時、禰宜等及昇殿奉拝見處、御葦萱御床之上、兩所相殿之神御座之上(ナ  
シ)板上令類(條)落・雨露霜雪直(立力)入之義、神慮難測者也

廿二

○延德四年八月皇太神宮神主解狀(延德引付)

史料網本に據  
右今月十七日風雨刻、依奉吹呉形文小壁板落懸而見給并令顛倒三鳥居給事、雖爲風  
雨刻、其外之鳥居四宇御門、瑞垣玉垣東西寶殿、外幣殿次々之御倉等令損失給上

者、是皆御遷宮延引之故也、殊又正殿之千木堅魚木、覆左右板御葦萱等悉令損落地  
上、忝御神體被侵雨露給事、難治次第也。

以上の解狀ハ悉く造替を請ふものであるが、此後同様の解狀ハ明應二年十二月(延  
德引付)明應六年六月(宣秀卿記)同年九月(内宮臨時假殿遷宮記)にも見える。

廿三

○内宮臨時假殿遷宮記(羣書類從第一神祇部卷七)

一造宮所御下知す。

度々雖以解狀有注進御沙汰令停滯之條、神慮叵測者也、縦近々ニ可被成造替之旨雖  
被仰下、御材木着岸依山川大儀、日時可有逗留之處、刺御沙汰延引之間、可及御顛  
倒事勿論歟、所詮先臨其期而可奉鎮御躰儲殿可有造進歟否之由、以權禰宜氏保神主  
被仰下之間、則一禰宜守朝可然之由被申仍氏保神主頭工等召集令談合、御假殿任

度々例、東寶殿之舊跡ニ儲殿ヲ、可有造進之由、被申付・・・  
(明應六年九月)廿日、二守則・・・等、予之里宿有集會、可有御遷宮事、可然歟否之  
仔細、令擬評議給事

件御遷宮事、爲廳裁雖有議定、天下ヲモ不被經私トシテ可有御沙汰事、且神慮之恐、  
且天下ヨリ御訝、又御裝束絹布、其外地鎮後鎮以下祭物等定、可爲不足旁以可爲如何  
之由、各申處・・・而面々意見區ニシテ難議定所詮只任神慮御圖可然歟之由、上首禰宜  
被申處最可然之由被申、各同心、・・・次彼御圖一座直捧持、御前退出アリ、傍官以  
下烈座於中披給處、可有遷御ノ御圖也、一同歡喜不斜・・・  
明應六年十月十二日御遷宮の儀式の記ハ畧す。

今度御遷宮者、去寛正之御遷宮ヨリ至三十六年之間、宮立以來御殿御朽損不可過之者  
哉、然間以外難堪之條、令取御闡任神慮、奉成遷御者也、雖然爲神宮奉執行之間、諸  
事卒尔之沙汰也、於以後是勿爲例、神宮之器者、只可奉仰本式沙汰者也

皇太神宮禰宜荒木田神主守晨

廿四

○伊勢遷宮次第記

文明十八年丙午十二月廿四日外宮假御遷宮古殿・・・中略・・・廿四日一禰宜朝敦神主  
與物忌父 二藤某神主密奉移御躰於古殿畢未曾有珍事也、自廿二日觸穢百日、奉上朝  
夕大御饌今按稱正殿者享德假殿乎

廿五

○遷宮次第記

長享元年丁未九月三日外宮假殿遷宮  
旧記云依去年十二月廿二日炎上也、自今年四月營建假殿今日遷宮畢

廿六

○外宮子良館舊記

延徳元年巳酉八月十一日古殿御假殿天火にて御燒條、御寶物なども悉く御やけ候、同  
御船代も御燒候、御寶物は御政印の御藏へうつし候、同御船代は酒殿御藏に御うつし  
候、其時の番の禰宜は檜垣常頼にて候。

廿七

○外宮子良館舊記

(延徳二年)九月十四日の丑の時、正殿天火<sup>神</sup>らん又附火<sup>神</sup>らん御燒つ・・・  
十六日に迁宮 由候

○内宮子良館記

(延徳二年)同九月十五(四魃)日夜寅剋許外宮正殿炎上ス不知是非天火歟、去年酉年八月  
十八(一魃)日夜同古殿炎上ス、去文明十八年十二月廿二日同正殿炎上ス榎倉掃部助所  
行也、五ヶ年之間二三ヶ度炎上不思儀子細也

○遷宮次第記

延徳二年庚戌九月六日外宮假殿遷宮依今月十四日炎上也

○後法興院記上卷延德二年九月廿三日條  
去十四日伊勢内宮（外宮の誤カ）炎上云々、廢朝三ケ日云々

○實隆公記延德二年九月廿二日條

廿二日辛丑到降時に日光現外宮假殿回祿事昨日粗觸聞未知實否事之俄可尋已下刻頭辨消息廢朝事也、則加下知了繼左

延德二年九月廿一日宣旨

依豐受太神宮假殿回祿事廢朝五ケ日、宣令停止音奏警蹕

藏人頭左中辨藤原俊名奉

廿六日

御神宮連續火事以外事也、軒廊御卜可被行之、處被行御卜者、則可被行一社奉幣事也、件用脚万疋餘也、公武當時其了(里)出現不審可爲如何之由有沙汰

○後法興院記上卷延德三年六月十一日條

外山民部少輔、今峯等末、令对面、有勅問事、去年勅問事、猶被經御沙汰云々

勅問人數、禪閣、下官、關白、前左府、左府前右府等云々

仰詞

就神宮炎上祈謝事、齋場所被准神宮、於彼所可有其沙汰歟、又近日武家惣用少々沙汰之間、公人下行事被仰宥可被發遣奉幣使歟、但外宮禰宜神躰炎上歟否事御糺明之處、不致參洛緩怠間、官職等雖望申無御許容趣也

余申詞

就神宮炎上之儀以齋場所被准神宮可有祈謝哉否事、惣用且有其沙汰者被宥仰公人等、如先視可被發遣奉幣使條最可相叶神慮歟、於外宮禰宜緩怠事者猶被尋決子細、追可被處其身於罪科哉、宣在聖断矣

同十七日條

大藏卿來、有勅問事、神宮炎上祈謝事也、被仰禪閣、下官、關白云々

申詞如此

就豐受大神宮（外宮事也）炎上神躰縱雖爲紛失、於奉幣使者如元可被發遣哉否事、祭神如神在云々、然者強不可及有無之沙汰者哉、殊内宮之儀爲肝要歟、以一旦之火災可被闍万古之灵跡條神慮最難測、猶可在時宣矣

七月九日甲申晴、太神宮一社奉幣事、昨日被發遣奉幣使云々

○外宮子良館舊記 續羣書類從 卷第十九

延德四年

一同年五月廿八日の夜。御饌殿へ盗人參。御飾の指悉取申候・・・

六月廿五日之夜。正殿に盗人參候

同夜御饌殿へも參候、又七月十三日の夜。高宮同風宮へも參候、是ハ假殿にて候間、**当(た)や(す)**く參候。大宮をも、みづがき御門計明申候。同七月十三日の夜の事にて候、同七月十四日に盗人を榻、頓に色々申候得共、**落削**候間、十六日の夜きられ候

○實隆公記文龜元年九月條

十七日壬辰晴、豐受太神宮依去年地震、大略破損之間、爲神宮神役人等、造假殿十六日(昨日)、可奉成遷宮之由、注進之此事兼日不及其沙汰次第之儀、頗相似聊尔也、雖然、已昨日可有迁宮也、於于今不能是非候・・・

○遷宮次第記

文龜元年辛酉九月十六日外宮假殿遷宮

○外宮子良館舊記

文龜元年爲奉加假殿遷宮

#### 第四節 祭祀の廢絶

註一

○氏經神事記 大神宮叢書 神宮年中行事大成前篇

寛正四年九月十七日晴 官幣延引

十月廿四日官幣

寛正五年六月十七日 月次祭官幣延引神宮神事如此

寛正六年六月十七日條

同夜、宮司氏長參之間、神宮十人、神事如常、但東寶殿ヲ不開、只送文讀進マテナリ兼村勤之、一殿御遊等六七八十從、幣馬者雖爲五神主番、不及沙汰、假殿事公武共ニ嚴密雖被仰出且無用脚且無依頭人無沙汰被打置之間、爲奉驚可閣諸神事由言上、仍**官幣ヲ不請取**、然而於内々常神事等者爲神爲公行之

寛正六年九月十七日、雨、去月次祭官幣今夜可有奉納之由・・・

寛正六年十二月十七日條なし。十六日條による

同日、行神事下向之時分幣使舍人平兵衛語云、外宮者去十四日夜焼亡ニ馬二疋焼死、其穢爲七日、仍閣神事、傍官不被參宮中、幣使可有御逗留云々、よつて延引したことがわかる。

寛正七年三月八日

祈年祭可爲來十一日由、五日祭主不知、今日宮司告狀回覽 よつて延引

寛正七年九月十七日、晴、例幣無下着、神嘗祭

寛正七年十二月十七日、晴、官幣無下着、就山門訴訟海道ヲ塞、仍例幣使柏木ニ有一日逗留テ、シカラキ越ニ御上落(洛力)云々、仍無下向歟、神宮神事如恒・・・

文正二年二月九日、晴、祈年祭延引、去月十八日畠山伊豫守殿、同尾張守殿合戰死人等依洛中觸穢歟、然而無延引告知

文正二年六月十七日、雨、京都念劇合戰死人觸穢、依遷宮遅々、自兩宮支申間、月次官幣無下着・・・

文正二年九月十七日、晴、依京都合戰不及官幣御沙汰・・・神事之次第如常・・・

文正二年十二月十七日、晴、宮司氏長、神宮予二三四五六七八十、玉串貞重、祇承時本、神事如常、官幣無沙汰・・・

二

應仁二年二月九日 官幣不及御沙汰、仍**神宮無神事**

六月十七日、雨、月次祭京都依念劇官幣延引



應仁二年九月十七日、雨、例幣不及御沙汰、神宮神事如常

十二月十七日、雨、月次祭、官幣不及御沙汰

應仁三年二月九日の條なし

六月十七日、晴、月次祭（官幣の記なし）

九月十七日、十二月十七日、（悉く官幣の記を見るを得ず）

文明二年二月九日の條なし

六月十七日、

九月十七日、・・・神嘗祭例幣無送

十二月十七日、・・・官幣無奉送

三

○應仁二年太神宮禰宜經興雜掌、五箇景雅の伊勢華臺寺領菊御菌を押妨せるを停められんことを神宮廳に請ふ目安（内宮引付）

右件御菌者、爲太神宮御領、毎年九月九日奉備菊花御饌嚴重神領也・・・仍于今全知行奉備御饌之處、去年自五ヶ方被押神稅之間、不及御饌供進之條、神慮難測者也・・・

○内宮子良館記

（明應二年九月）九日ノ菊花御饌ハ前ニ調進可申處、有尔御器マイラセザルニヨリ廿九日ニ奉備

四

○明應元年皇太神宮神主解狀（宣秀卿記）

・・・就中九月神嘗祭之御神吏者、天下無雙御祈禱之政、而雖致昇殿依正殿御朽損、去年者不遂其節之條、御祈禱令懈怠者哉

五

○内宮臨時假殿遷宮記

明應六年九月十七日

神嘗祭者、天下無雙御祈禱政、而荷前御調絹織御衣等雖致奉納御殿、就朽損昇殿依難叶、去年當年者、如形儀式許執行、不遂參昇退出、然者天下御祈禱令懈怠矣

六

○天文九年三月外宮解狀（外宮引付）

右當宮御假殿御朽損之故、去九月十六夜祭礼之刻、御戸鎖等落下難開之處、各廻方便移刻而神吏令執行之矣

○應仁元年五月にハ内宮神主解狀を上り、假遷宮を行ひ條々の違失を直し奉らねバ、月次祭を擧げる能ハざるを言上してゐるのも注意到價する（内宮引付）

七

○前節註十五ノ二にあり。

八

○内宮子良館記

明應二年癸丑九月御祭昇殿同廿八日ニ延引之事、去八月廿二日ニ山田没落ス、子細者爲上野與山田同心、國方へ依致緩怠七月十九日ニ有上野御退治、其儘諸勢日々合戦アル・・・然間山田モタマリカネテ、其夜皆落失ル、則山田三方悉放火・・・宮中ニモ切捨アルニヨリテ卅个日觸穢也、其穢依及兩宮、兩宮共卅个日觸穢也、仍廿二日ヨリ禰宜諸役

人參籠アリテ廿七日ニ御饌調進同新饗、同廿八日ニ昇殿アル、廿九日ニ次第神夏執行申也

九

○延德引付（延德記）

皇太神宮神主

依被仰下注進前二禰宜守氏闕替職可望申之旨、雖申付祠官之輩等、依宇治之一亂牢人仕之問、不及了簡之由、申上之條、不及力子細事

右件禰宜職事可望申之旨、雖申付祠官之輩等依一亂屋財悉燒失之間不及了簡之由、申上之條無餘儀者哉、如今者雖經五ヶ年十ヶ年、不可有望申者之條言語道斷次第也、抑十員禰宜等者年中數ヶ度遂行動事、每月三旬之神事、并各致番宿直、奉納御祈禱之處、數月未補之儀、神慮難測者也、殊來十二月祭禮、自十五日至廿五日、晝夜可奉遂行次第神事處、十員不足之條、太以不可然者也、次歲末年始者、別而禰宜等一同可奉抽天下泰平、國家安全之御祈禱之處、未補之條不可然者也、所詮以御神忠之儀、於今度者、御奏斷以少事預御免、被成下彼禰宜職、如先規禰宜等一同、奉致御祈禱之精誠者、天下弥靜謐、可爲國家安全者也、仍注進言上如件、以解

延德元年十一月日 大内人正六位上荒木田神主定治上

禰宜從四位下荒木田神主守朝

九人

一皇太神宮神主

註進早可預御成敗、當宮役人等依令牢人諸神事供奉令退轉之條、神慮難測問事

右件、役人等者、年始歲末之神事、并每月三旬之神事五節供、殊者年中三ヶ度之祭禮之時、勤役繁多也、雖然依（イ遂）無還住（イ任）諸神事供奉令退轉之條、神慮太不可然者、哉（イ併）急預御成敗、還住（イ任）仕（イナシ）如本式、令勤仕諸神役等者、併可爲御祈禱專一者也、仍註進如件、以解

延德三年三月三日 大内人正六位上荒木田神主定治上

禰宜從四位下荒木田神主守朝

十（九）人

第二章 神宮觀の混乱

一註一

○續紀天平神護二年七月丙子の條  
遣レ使造レ丈六佛像於伊勢大神宮寺一

○太神宮諸雜事記上天平神護三年十月三日の條

同年十月三日逢鹿瀨寺永可レ爲レ太神宮寺一之由被レ下ニ宣旨一既畢同年十二月月次祭使  
差副別勅使以ニ逢鹿瀨寺一永可レ爲レ太神宮寺一之由被レ祈ニ申皇太神宮一畢宣命狀具也

二

○太神宮諸雜事記

光仁天皇寶龜六年六月五日條

同六年六月五日神祇民石部楯梓同吉見私安良等字逢鹿瀨ヲ志天漁鮎之間逢鹿瀨寺ノ小  
恣師三人自寺出來恣ニ打ニ陵楯梓等一已了・・・

則左大臣宣奉敕永可レ停止神宮寺一飯高郡可レ被レ越宣旨已了官使左史小野宿祢也

三

○太神宮諸雜事記上

天平十四年辛巳十一月三日右大臣橘朝臣諸兄卿參ニ入於伊勢太神宮一其故波天皇御願寺  
可レ被レ建立一之由依ニ宣旨一所レ被レ祈申一也而勅使歸參之後以ニ同十一月十一日夜中一  
令ニ示現ニ給布天皇之御前仁玉女坐即放ニ金色光一天宣本朝和神國也可下奉レ欽ニ仰神明一  
給上也而日輪者大日如來也本地者盧舍那佛也衆生者悟レ之當レ歸ニ依佛法一也御夢覺之  
後御道心弥發給天件御願寺事於始企給倍利

○元享釋書十八

伊勢皇太神宮者、天照大神之廟也、初聖武皇帝欲レ創ニ東大寺一、即思念、我國家歷代  
奉レ神、今營ニ佛（神）字一、不知辰ニ神意一不欲レ試ニ機宣一、天平十三年勅ニ行基法師  
一授ニ仏舍利一粒一、詣ニ勢州一、獻ニ皇太神宮一基於ニ内宮南門大杉下一、縛レ盧而居、期  
ニ七日一持念告ニ上旨一第七之夜、神殿自開大声唱曰、實相真如之日輪、照ニ却生死之長  
夜一、本有常住之月輪燦ニ破煩惱之迷雲一我今逢ニ難遭大願一如ニ渡得レ船、又受ニ難レ得  
宝珠一、如ニ暗得レ炬、師其持ニ舍利一藏埋ニ飯高郷一、以ニ頼邦家一基棒ニ舍利一藏ニ彼所  
一、反レ都奏レ事、皇情大悦、上又謂、朕以ニ行基一爲ニ廟使一恐不レ協ニ朝儀一、十一月三  
日、重勅ニ特進右僕射橘公一詣ニ勢州一、十五日、僕射復奏其夜上夢、皇太神宮告白、日  
輪是毘盧遮那也、帝得ニ此意一爲ニ宮興一、言已現ニ日輪相一其光赫如也、帝覺感激以レ故  
東大寺大像高一十六丈、蓋擬ニ毘盧一也非ニ分身丈六之量一也、神宮之降迹、備ニ太常国  
史一、今只載ニ因レ佛之一事ニ云・・・

○太神宮參詣記（通海法印）下

第三 被レ立ニ太神宮勅使一被ニ神祈ニ仏法興隆一事

同ギ、十五日、天皇ノ御灵夢ニ云フ、吾朝ハ神國也、神明ヲアカメ奉ルベシ、然ルヨリ日  
輪大日如來本地盧遮那佛也、衆生ハ此理ヲ悟リテ、マサニ佛法ヲ崇ムベシト・・・

第四 内宮御本地神託事

一是太神宮ノ御本地ヲ顯ス也、此灵夢ノ心ハ、上明一ノ君ヨリ下無ニノ民マテ、御本地  
ヲ知テ佛法ヲ崇メヨト也。・・・

サレハ三國第一ノ大伽藍、吾朝南都東大寺ノ本佛ハ金銅十六丈ノ盧遮那佛也、天照太神  
ノ御本地、脇士ノ觀音虚空藏ハ、左右ノ相殿春日大明神太玉命本地ナルベシ。是ニヨリ

テ

一水尾天王モ盧遮那佛、觀音、虛空藏ノ三尊ヲ顯シテ、年始御齋會ノ本尊ト定メ置レ侍リキ、眞言院ニハ又内外二宮ノ御本地理智兩部ノ曼荼羅ヲ安置シテ、密教ニ付テ後七日ノ御修法ヲハシメヲカル・・・

○大和葛城寶山記

大日靈貴尊此名日神也、日則大毘盧遮那如來智惠日光之應變也、梵音毘盧遮那、是日之別名、即除暗遍照之義也、日者天子常住之日光、與世間日光、於法性躰、有相似儀、故名大日靈貴天照大神也・・・

○太神宮參詣記下（通海） 廿五

天照太神（宮口本）ハ神道ノ主、大日如來法花ハ佛法ノ主也、垂跡ト云、本地ト云、無上也、無比也、此理リヲ知テ神明ニモ仕ヘ、眞言ヲモウカヽヒ給ヘキ也、王ト申ハ天地人ノ三ヲ貫テ王ノ字ヲツクレリ、世間ヲ統タルヲ王トハ申ス、然ラニ所太神宮地神ノ始トシテ此地ニ誕生シ給シカトモ、即天上ニ登リテ普ク世界ヲ照シ玉ヘリ。光リヲ凡夫ニ和テ、跡ヲ五十鈴川上ニ垂オハシマス。是天地人ノ三ヲ貫キ給フ也。其德ヲ兼タルノミニアラス、事ニツキ闕タル事ナシ。而テ大日如來モ金剛界ヲ天曼荼羅ト云、胎藏界ヲ地萬荼羅ト申。其中ニ卅七尊以下十界ノ依正、皆中臺ノ德ニ非スト云事ナシ。故ニ天地人ヲ重テ大日如來ヲ佛界ノ中ノ王ト申也。天照太神ノ御本地ナル事其謂レ侍リ

○「同じ処の少し前」然レハ大日如來ヨリ眞言傳法ノ血脈廿四五代天照太神ヨリ授ケ給ハレハ、秘密甚深ノ法施ヲ以テ、大日垂跡ノ御前ニテ、法味ニ賁リ奉ラン事、爭カ納受ナカラシヤ・・・、

#### 四

麗氣記中の二所太神宮麗氣記

天照皇大神宮鎮座次第

天照皇大神

大悲胎藏界八葉中臺・・・

經曰、本躰盧遮那。久遠成正覺。爲度衆生故。示現大明神

亦曰。本躰觀世音・・・

天王如來、爲度衆生、上去下來、上從飛空天。下至大八洲大日本伊勢度會郡宇治

郷五十鈴河上御鎮座、是秘察大乘法々、入法界宮、自性三昧耶、根本大毘盧遮那

神變加持胎藏界、法性心殿、入佛三昧耶法界・・・

密號、遍照金剛

神躰、八咫鏡座

相殿座神

左、天手力男命

右、栲幡豊秋津姫命

伍什鈴河上山田原豊受皇太神鎮座次第

豊受皇太神

金剛界成身會・・・

金剛號、遍照金剛

神躰、飛空自在天說法談義精氣也・・・

相殿座神

左皇孫尊天上玉杵命二柱一座

右天兒屋命、太玉命

豐受皇太神 人壽四萬歲時、降臨淡路國三上嶽座、次布倉遷座、次八輪鳴遷座、次御間城入彦 五十瓊殖天皇御宇、丹波國与謝之郡比治山頂麻井原天照太神與一所座給、其後竹野郡奈具宮坐、于時奈具神奉朝御氣爲御饗、亦奉上白黑酒姬神神酒也、亦天照太神爾夕御氣備進、儀式如 朝御氣備也

・是爲戸棄大梵天王、是名天御中主尊、亦名豐受皇大神云々・・・  
是名光明大梵天王、是名天御中主尊、亦名天照坐皇太神

今兩宮則兩部大日色心和合成一躰、則豐受皇大神宮内一所並座也、此事勿合發言、可兩宮崇坐故夫梵号梵密号及獨古、從本一也、以一分二、爲天地、以天地爲兩宮、以兩宮爲兩部、二神暫立迷悟給故、雖分化儀、内外本有平等一理周遍法界故、一大三千界主仁皇坐也

五 ○輝天記山王事の條に、「本地ノ高キ事ヲ仰テ垂迹ノ弧止事無ヲ知タテマツルナリ」とあるのハ、一般的な考へ方でハなかつたらうか。

六

○三輪大明神緣起（續群書類從神祇部四十六）

一天照大神本迹二位事

此大神本迹二門御、今依古記並現在之事、其旨可奉明也、先本地者予以某年某月日、全七ヶ日之詣、天照皇太神御名義、奉知祈申、當第七日結願之日、早且詣御殿之間隔訶處、藁中處、致懇篤信祈申之處、御殿卜覺訶上當、於空中有音、唱曰、第一義、**天金輪王光明遍照大日尊**云々、予承此御言、不取敢、心得候申、即下向畢、天第一義天也、照光明遍照也、尊大日尊也、此三段之内、天者應身如來、照者報身如來、尊者法身如來也、謂眞性觀照資成之理智悲三點也、故知、此御名**三身即一之大日名乘御也**、此約本地之意也

次垂跡者、依三處位、御名字不同御、於天上御名天照也、御降臨之後二所別御、於大和國三輪山者大神大明神申、於伊勢國神道山者申皇太神、一躰三名尤可奉知事也・・・一伊勢大神宮與三輪前後事

日本紀神代卷云、大己貴命白天照皇太神言、今欲何處住乎、答曰、吾欲住於日本國三輪山云々、故知三輪太神御降臨神代事也、天照太神之御鎮坐垂仁天王代也

前後顯然也、依之以前而爲本、以後而爲迹、是是一重本迹也、若依佛法奧義爲本迹、又是三輪本也、正依佛法示相故、神道山爲迹、示現忌佛法之外相故也・・・所詮天宮天照皇太神、佛部法身如來也、三輪山天神大明神金部報身如來、神道山皇太神蓮部應身如來也、古記云、天照太神者、觀音垂跡、其義符合・・・

## ○燿天記

一大宮御事の條

尋本躰、天照太神分身、或日様トモ或申日吉トモ、是則垂跡於叡岳之麓、施威於日下故……

## ○嚴動鈔山王權現鎮座御事

天照太神ハ大日應化身、約シテ真言門ニ尺迦佛ヲ大日ト示シ、大宮權現ハ尺迦垂迹神、約顯教門ニ大日ヲ尺迦ト現ス、又大宮權現ハ本地天照太神ニテ御座也……

## ○燿天記本文に續く

能々はヲ案ズルニ、尺迦ノ我ハ日本國ノ中ニ日吉山王ト神ニ現シテ、衆生ノ現世後生ヲモタスケ、又ハ圓宗ノ佛法ト云最上ノ大教ヲモボラムト思ニ、マズヲノヲ先立テ、神ト現テヲハシマセ。サテ後ニ日本國ヲ神明繁冒ノ地トナシテ神ヲバ信ズベシトシラセ、畏ルベキコトナリト思ヒナラハセテ、我彼國ニ光ヲ和、神ト現シテ衆生ヲ利益センズルナリト、往古如來法身ノ大士ダチニ仰ラレ合テ、神ト現テ叡山ノフモトニ山王トイハ、レテヲハシマスト覺也……

實ニ日本國ハ小国ナレバ、出世成道ノ地ニモカナフマジ、小根薄善ノ人ノミ淺近鈍昧ノ族バカリ集マレル所ナレバ說法教化ノ器ニモアタハズ、タダ様ヲ替テ神ト現シテ不淨ヲ誠メ不信ヲ懲シ、懈怠ヲタ、リ精進ヲス、メテ、信不信ニ付テ賞罰ヲ正シクシテ現世後生ノ願ヲ滿ント思食シケル也、委ク思ヘバ、天尊ノ善功身ニシミテ哀ニ思ボユ

## ○沙石集卷第一太神宮御事の條

去弘長年中に、太神宮へ詣でて侍しに、或神官の語しは、『當社に三寶の御名を忌、御殿近くは僧なども詣ぬ事は、昔此國いまだ無りける時、大海の底に、大日の印文有けるによりて、太神宮御銚を指入て、さぐり給ける、其銚の滴り露のごとくなりける時、第六天の魔王はるかに見て此滴國と成つて、佛法流布し、人倫生死をいづべき相ありとて、うしなはんために下りけるを、太神宮魔王に行むかひ、あひたまひて、  
「我三寶の名をいはず、我身にも近づけじ、とくとく歸り上り給へ」と、こしらへ給ければ、歸にけり。其御約束をたがへじとて、僧など御殿近くまいらず。社壇にしては經をもあらにはもたず、三寶の名をもたたくはず、……  
都ては大海の底の、大日の印文より事おこりて、内宮外宮は兩部の大日とこそ習傳へて侍れ、……

## ○江淡抄第一佛神事

熊野三所本緣事

又問云熊野三所本緣如何、被レ答云熊野三所ハ伊勢大神宮御身云々、本宮并新宮ハ太神宮也、那智ハ荒祭、又太神宮ハ救世觀音御變身云々、此事民部卿俊明所レ被レ談也

云々

此外前出の二所太神宮麗氣記、三輪大明神緣起にも見ゆ。

淨土宗系統の對神祇觀持々の神宮觀の一斑

蓮如上人六箇條

一神社をかるしむることあるべからず

一には、一切の神明とまうすは、本地は佛菩薩の變化にてましませども、この界の衆生をみるに、佛菩薩には、すこしちかづきにくくおもふあひだ、神明の方便に、かりの神とあらはれて、衆生に縁をむすべて、そのちからをもてたよりとして、つるに佛法にすゝめいれんがためなり、これすなはち、和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利佛のをはりとといへるは、このころなり、さればいまの世の衆生、佛法を信じ念佛をもうさん人をば、神明はあながちにわが本意とおぼしめすべし、このゆへに、彌陀一佛の悲願に歸すれば、とりわけ神明をあがめず信ぜねども、そのうちに、おなじく信ずることろはこもれるゆへなり。

一言芳談二（作者不明、元祿二年版）

○念仏

有云惠心僧都、伊勢太神宮へまいりて、七箇日參籠をはり夜の夢に、宝殿の御戸たちまちにひらけて、ゆゝしげなる貴女一人いでたまへり、云々。

太神宮は本覺の都へかへりおはします、これは御留守に侍ものなり、末代の衆生、出離の要道をたづぬる事あらば、彌陀仏を念ぜよとすゝむべきよし、おほせをかれ侍る

十二

○神國王書

其の上、神ハ又第一天照太神、第二八幡大菩薩、第三は山王等の三十餘社、晝夜に我國をまほり、朝夕に國家を見そなはし給ふ。其の上、天照太神は内侍所と申す明鏡にかげをうかべ内大裏にあがめられ給ひ、八幡大菩薩は寶殿をすゝて主上の頂を栖とし給ふと申す、・・・

其の上、八幡大菩薩は殊に天王守護の大願あり、人王第四十八代に高野天皇（稱徳）の玉體に入り給ひて云はく、我が國家開闢より以來臣を以て君と爲すこと未だ有らざる事也、天之日嗣は必ず皇緒を立てよ等々、又太神行教に付して云はく、我に百王守護の誓ひ有り等云云。されば神武天皇より已來百王に至るまでは、いかなる事ありとも、玉體は恙あるべからず。王位を傾くる事もあるべからず、・・・

天照太神は玉體に入りかはり給はざりけるか、八幡大菩薩の百王の誓は、いかになりぬるぞ、

十三

○聖愚問答抄上九

又第三の禮拜雜行とは『念佛の行者は弥陀三尊より外は上に擧ぐる所の諸佛、菩薩、諸天善神を礼するをば禮拜雜行と名け、又之を禁ず。』然るを日本は夫れ神國として伊奘諾・伊奘册の尊此國を作り、天照大神跡を垂れ御坐して御裳濯河の流れ久うして今にたえず、豈此國に生を受けて 此邪義を用ゆべきや。・・・

十三

○御書三十六 念佛者追放宣旨狀

夫以佛法流布之砌者天下静謐也神明仰崇之界者國土豊饒也依之自二月支一覃二日城一自二君王一至二人民一此義無レ改レ職然後鳥羽院御宇有ニ源空法師者一欺二道俗一故興二專修一而破三顯密之教理一誑二男女一故構三邪義一而滅二佛神之威光一常誘二四衆一云浄土三部之外可三棄二置衆經一稱名一行之外可三廢二退餘行一矧於二神祇冥道之恭敬一況於二孝養報

恩之事善<sub>レ</sub>哉不<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>之者疑<sub>二</sub>本願<sub>一</sub>也爰頑愚之類輕<sub>二</sub>慢甚深之妙典<sub>一</sub>無智之族ハ蔑<sub>二</sub>如神明之威德<sub>一</sub>・・・

又近來不<sub>レ</sub>辨<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>之輩不<sub>レ</sub>儼<sub>二</sub>佛神<sub>一</sub>之類再企<sub>二</sub>專修之行<sub>一</sub>猶增<sub>二</sub>邪惡之甚<sub>一</sub>矣日蓮雖<sub>二</sub>不肖<sub>一</sub>且爲<sub>レ</sub>思<sub>二</sub>天下之安寧<sub>一</sub>且爲<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>佛法之繁昌<sub>一</sub>強宣<sub>二</sub>說先賢之語<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>廢稱名之行<sub>一</sub>・・・

一奏狀篇

南都奏狀云

一謗人謗法事

一蔑如靈神事

一一向專修黨類向背神明不當事

・・・

○御書二十七 諫曉八幡抄

今案<sub>レ</sub>之ヲ日本國ノ王トナリ神トナリ給ハ小乘ニハ三賢ノ菩薩大乘ニハ十信法華ニハ名字五品ノ菩薩也、何ナル氏神有テ無盡ノ功德ヲ修ストモ法華經ノ名字ヲ不<sub>レ</sub>聞一念三千ノ觀法ヲ不<sub>二</sub>守護<sub>一</sub>者退位ノ菩薩ト成テ永無間大城ニ沈ミ候へし。

十五

○神道五部書

△天照坐伊勢<sub>二</sub>所皇太神宮御鎮座次第記

天照坐止由氣皇太神一座

・・・古語曰、大海之中有二物一浮形如<sub>二</sub>葦牙<sub>一</sub>其中神人化生號<sub>二</sub>天御中主神<sub>一</sub>亦名<sub>二</sub>國常立尊<sub>一</sub>亦曰<sub>二</sub>大元神<sub>一</sub>故號<sub>二</sub>豐葦原中國<sub>一</sub>亦因以曰<sub>二</sub>天照止由氣皇太神<sub>一</sub>也與<sub>二</sub>大日靈貴天照太神<sub>一</sub>豫結<sub>二</sub>幽契<sub>一</sub>永治<sub>二</sub>天上天下<sub>一</sub>給也

△豐受皇太神宮御鎮座本紀

天地初發之時大海之中有一物、浮形如葦牙、其中神人化生、名號天御中主神、故號豐葦原中國、亦因以曰豐受皇太神也・・・

十六

△豐受皇太神宮御鎮座本紀

蓋聞天地未<sub>レ</sub>割、陰陽不<sub>レ</sub>分以前、是名<sub>二</sub>混沌<sub>一</sub>、萬物靈是封名<sub>二</sub>虛空神<sub>一</sub>、亦曰<sub>二</sub>大元神<sub>一</sub>、亦名<sub>二</sub>國常立神<sub>一</sub>、亦名<sub>二</sub>俱生神<sub>一</sub>、希夷視聽之外、氤氳氣象之中、虛而有<sub>レ</sub>靈、一而無<sub>レ</sub>體、故發<sub>二</sub>廣大慈悲<sub>一</sub>於<sub>二</sub>自在神力<sub>一</sub>、現<sub>二</sub>種々形<sub>一</sub>、隨<sub>二</sub>種々心行<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>方便利益<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>表名曰<sub>二</sub>大日靈貴<sub>一</sub>、亦曰<sub>二</sub>天照大神<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>萬物本體<sub>一</sub>、度<sub>二</sub>萬品<sub>一</sub>、世間人兒如<sub>レ</sub>宿<sub>二</sub>母胎<sub>一</sub>也、亦止由氣皇太神月天尊・・・

○倭姬命世記

・・・凡伊勢<sub>二</sub>所皇太神宮則伊弉諾伊弉冉尊崇神宗廟社稷神、惟群神宗、惟百王祖也、尊無<sub>レ</sub>與<sub>一</sub>、自餘諸神者、乃子乃臣、孰能抗夜止詔布、吾聞大日本國者神國奈利、依<sub>二</sub>神明之加被<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>國家之安全<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>國家之尊崇<sub>一</sub>、天、增<sub>二</sub>神明之靈威<sub>一</sub>、須、肆<sub>二</sub>祭<sub>一</sub>神之禮、以<sub>二</sub>神主祝部<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>其齋主<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub>茲利豆大若子命弟若子命、同侍<sub>二</sub>殿內<sub>一</sub>、善爲<sub>二</sub>防護<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>國家<sub>一</sub>禮羅波、寶詐之隆、當<sub>二</sub>與<sub>二</sub>天壤<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>窮矣・・・

十七

○大神宮の言葉が乱雜に使用されてゐる事ハ、住吉大神宮、賀茂皇太神宮、香取太神



宮、丹生太神宮等その一例と云ふ事が出来る。  
外宮に皇字を用ふることを否定したものハ、

廿二社本縁（新校羣書類從卷第二十一）に見ゆ

#### 伊勢事

太神宮仁内外宮座す也、仍二所太神宮登申す、内乎波皇太神宮、外乎波豊受太神宮登奉二  
號志一、豊受乃宮仁毛皇乃字乎可二幾被レ加之由、外宮連々申之、然而トモ内宮乃支申寸事  
也、大方多外宮乃鎮座依二天神勅ル縁起セ志ヨリ、式條仁在二其乃法一、末代乃今皇乃字乎  
可二登被レ加申請留神慮難レ測事也・・・

十八

○神宮觀混乱によつて導かれた私的信仰

△耕雲紀行（花山院長親・応永廿六年春書之）

神もしはし世を度會の宮ゐして人にちきりをむすふなりけり

神道に方所なし。和光同塵の垂迹、度生の大悲よりをこる。われら本覺の旧都を出て、  
三界の逆旅に奔走すと思へり。これ又妄想の所見なり。神はさためて照破し給らん・・・  
これハ本地垂迹の否定であるが、一般的に垂迹觀で參宮する者のあつた風潮を物語る。

△伊勢參宮紀行普廣院殿御參宮之時（義教）永享五年權大僧都堯孝

△伊勢參宮紀行普廣院殿御參宮之時（義教）永享五年權大僧都堯孝

抑御神五十鈴の川上に宮所をしめ、高天はらに千木高知（り、ロ本）下都磐根に大宮柱  
廣敷立てしつまりましますことも、世をまもり、國をたもち、人をはくゝむ御ちかひ  
なるべし。今我君（將軍の事）豊蘆原千五百秋瑞穗國をつかさとりおはしまして、神を  
あかめ、政をたすけ、民をたて給ふ御めくみも、神慮「に、イ本なし」へたてなくおは  
しませは、太用命の八万歳をたまひまして、御子孫百世ならむ事のいとまかしこ  
くおほえ侍るまゝに詠進の三首、

（第二首）

をよふへし君かよはひも万歳八たひかさねし神の昔に

・・・・・・

たのむそよ内外の宮のゆふたすきかけてをめぐめ此世後の世

皇祖神としての認識が失はれてゐること、將軍を殆ど上御一人の様に考へてゐること、又その  
私的祈願、神宮觀の混乱に由来する。

△（鐮矢記）

敬白

周瑞天徳関東管領の利運を大神宮に祈願

関東管領相公并家□□□□眞俗等速遂本意、大小本所地等合還補、干戈頓息、群  
敵降伏、諸□□□□万民快樂、五穀成就、國家安寧、釋氏丙戌、福壽増長、扶佐檀門、  
長領權柄、富貴自在、舍第一門繁昌、一切願望圓成、然者先御供錢一貫二百文、御神馬  
錢一貫二百文、可奉獻、於無爲泰平世、代長久者、武州御厨屋、同下總州葛西庄御神領  
等可申沙汰者、仰願者、知見丹精、神明垂賜納受、仍願書如件

永正九年壬申九月廿日 願主沙門天徳叟周瑞判

進上 大神宮六禰宜殿江參 檜垣禰九郎殿御申上

○東大寺衆徒參詣伊勢大神宮記

一同廿九日御經供奉事

敬白

夫天照大神者、我朝之本主、此國之祖宗也、實智不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>邊、雖<sub>レ</sub>秘<sub>二</sub>本地於法性家<sub>一</sub>（寂カ）光之都<sub>一</sub>、大悲遂不<sub>レ</sub>捨、猶留<sub>二</sub>應現於娑婆穢惡之境<sub>一</sub>、即天地開闢之昔、此國未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>主之時、伊弉諾尊忽化生<sub>二</sub>日神之精靈<sub>一</sub>、天屋巖戸高開、施<sub>二</sub>清輝之神德<sub>一</sub>、御之刻、一天忽晴晝夜之明味爰分、四海悉澄帝位圖籍始成、國之爲<sub>レ</sub>國由<sub>レ</sub>何、君之爲<sub>レ</sub>君誰力、皆吞<sub>二</sub>（忝カ）大神之靈眷<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>大悲之惠德<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>之上自<sub>二</sub>全（金カ）輪一人<sub>一</sub>、下至<sub>二</sub>茅戸之兆民<sub>一</sub>、凡厥横目、誰不<sub>レ</sub>傾<sub>レ</sub>頭者哉、是以我寺本願感神聖武皇帝、傳<sub>二</sub>釋尊遺法於慈氏尊之曉<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>導<sub>二</sub>我國衆生於一佛土之境<sub>一</sub>、勤<sub>レ</sub>人造<sub>二</sub>希代之大像<sub>一</sub>、傾<sub>レ</sub>國立<sub>二</sub>高廣之伽藍<sub>一</sub>と思食キ、即獻<sub>二</sub>勅使於當宮<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>靈應於大神<sub>一</sub>、御之處、神慮大感、冥助忽通・・・

○神宮法樂の侵入

△東大寺衆徒參詣伊勢大神宮記

（文治二年四月）

一當日廿六日御經供奉次第事

・・・去二月參<sub>二</sub>詣當宮<sub>一</sub>、心中祈<sub>二</sub>念此事<sub>一</sub>之間、夢中聊有<sub>二</sub>示現之告<sub>一</sub>、神若添<sub>二</sub>內證之法樂<sub>一</sub>者、佛殿定可<sub>二</sub>成就<sub>一</sub>之趣也・・・偏奉<sub>レ</sub>莊<sub>二</sub>當所神宮之法樂<sub>一</sub>、本地爾增<sub>二</sub>內證之莊<sub>一</sub>、垂跡更添<sub>二</sub>威光之影<sub>一</sub>・・・

△大神宮參詣記下（通海）第十六般若法味御納受春乘房靈夢事

外宮ノ砌り於世義寺、建長七年十月ノ比、南都ノ上人アマタ、内外宮ノ爲御法樂ニ千部ノ法花經ヲ轉讀セントシ侍ケルニ、外宮ノ一禰宜行能、神宮近キ程也、可<sub>二</sub>制止<sub>一</sub>由自餘ノ禰宜ニ賦<sub>レ</sub>申ケルニ、三禰宜興房、五禰宜惟房、六禰宜朝行申ケルハ、其<sub>レ</sub>ハ去ル年既ニ無爲ニトケ畢ヌ、今制止ノ條、若シ神慮ニ背カハ、豈不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、同シ申シ難キ由申ケル程ニ、評定ノ後第三日ノ夜、禰宜惟房ノ神主カ夢ニ、一首ノ歌ニ滿テキコヘケリ

染紙ヲ 千々ニ手向ル 聲聞テ イカニウレシト 神モ聞ラン

是ハ納受ノ至リイチシルク聞エ侍リ、其後禰宜共皆信心「ヲヲ（諸本ナシ）」發シテ、五ケ日ニテ結願スヘカリケルヲ、七ケ日ニ延行ヒ侍リキ・・・

○神宮への法樂侵入

内宮引付

廳宣

可早奉法樂法華經一萬部事

右爲太神宮法樂、沙門善光令勸進、以十万檀那助緣、可奉法華經一萬部讀誦云々、然早任宿願之旨、勸勸進之功、速可遂法樂之節之狀、所宣如件、以宣

文明六年四月五日（件廳宣依不可然難難澁、地下長依懇訴成之）

禰宜荒木田神主判 十人連判

此の類のものハ他にも三・四見える。

外宮引付

文明十三年

大般若經御寄進目出度候、連々致轉讀可申御祈禱付者、細々致神法樂候者、可令然神

慮候間、神御忠候、於千身祝著此事候、恐々謹言

十二月廿三日

氏經判

内宮一神主

梅戸三河守入道殿御宿所

廿

○神主側の神境寺院脩建助縁

△内宮禰宜荒木田守晨引付上

廳宣

可早以諸國貴賤之合力致造立内宮菩提山神宮寺事

右當寺者、太神宮法樂長日之勤行、自往昔遂其節、致天下泰平御祈禱之處、近年以外令打損、寺僧等之住居無其便、而神法樂之闕如難堪次第也、爰眞言之行者權大僧都神慶、存神忠令勸進諸方、以十方檀那助縁、欲致興隆所存之至、神妙々々、子細載勸進帳具也、彼法師合力之輩者、神慮令然、可所願成就矣、宣任誓願之旨、遂造畢之節、抽一天安全四海平定、諸國豐饒万民快樂精神之狀、所宣如件、以宣

永正四年八月 日

禰宜荒木田神主判十人

同様のものへ、内宮法樂舍護摩堂興隆助縁の廳宣（永正十年九月 内宮引付）

廿一

○内宮引付

一廳宣

早可遂勸進節会再造神風伊勢國鈴鹿神戸野村新福寺事

右神戸者、忝天照太神御降臨時、味酒鈴鹿關奈具波志忍山爾遷御神宮造六ヶ月奉齋、神田并神戸進支、如此神代有謂清浄之靈地、異乎他矣、神宮之規範、而表雖屏佛法之經教、裏奉仰**神明之垂跡**者哉、然造立堂舍大伽藍號新福寺、致法樂勸行之處、去文明四年兵火起、聖德太子製作、行基菩薩彫刻之佛像等滅盡、子細裁勸進帳具也、爰沙門宣光欲令再興、所存之至、神妙々々、**助成輩可神忠**之狀、所宣如件

永正八年正月 日

禰宜荒木田神主判十人皆判 三禰宜依所望被成功之也

神地變じて仏閣となる。その仏閣も神明の垂跡であるから、又、法樂勸行の處であるから、その再造を助成するハ神忠であるとする。神仏習合ハ神宮ハ衰へても寺が栄える事となる。

○豐葦原神風和記佛神同異（意イ）事

佛法未渡サリシ其ノ昔シ垂仁天皇ノ御宇ニ御託宣トシテ神道ヲ佛法ニ譲リ給ヘリ、サレハ佛神ノタクミ全同クシテ直俗ノミチ更ニ異ナル事無シ、所以ニ御託宣ニヲヒテ西天ニ直人アリト告ケ給ハ釈迦如来ノ御事ナリ、然ヲ如来ハ神明ニカワリテ世ニ出テ坐ス、神明ハ如来ニ譲テ託宣ヲ留トメ給ヘリ、然則佛ノ説給ヘル御經ハ悉ク尊神ノ御託宣ナルベシ・・・況ヤ日本ハ神國ナレハ佛法未タ渡サリシ時ニハ天下ヨシアシサ（キカ）ヲハ神明ノ御託宣ニヨリテ悉クハカレリト云ヘリ、アマリニ人ノ心イツワリアシキ事シケ（茂）レ（ク歟）シテ託宣モヲヨヒカタシ故ニ大神ハ仏教ニ譲テ託宣ヲ留メ給ヘリ、爰ニ知又佛神ノ内証同一ニシテ而モ化儀各別也ト云コトカ

## 第三章 神宮崇敬の普及

## 第一節 崇敬普及の外的由縁

○天照太神の全神統一思想

長寛勘文（群書類従卷四百六十三）

## 1 藤原長光の勘文

就中天照太神者、惟祖惟宗、尊无<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>二、自餘諸神者、乃子乃臣、孰能敢抗、況又天照太神勅曰、・・・神勅（天壤無窮）・・・

## 2 太政大臣殿御勘文

日本紀私紀云、今天照太神者、是諸神之最貴者也、延喜御記中有<sub>下</sub>太神宮與<sub>二</sub>豐受宮<sub>一</sub>如<sub>三</sub>君臣<sub>一</sub>之丈上、豐受宮猶然、況餘神哉

## 3 助教清原頼業勘文

是天照太神者、諸神之最貴者也、其尊嚴無<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>二、伊勢兩宮更無<sub>三</sub>敢抗<sub>一</sub>、天無<sub>二</sub>一日<sub>一</sub>地無<sub>二</sub>二王<sub>一</sub>之義也

○伊勢神道の神宮觀がそうである。前述の通り。

## △珊瑚集

豐受大神宮繼文曰、天照豐受太神者、非々想天（無色界天宮）能斷智躰、下々來々、於<sub>二</sub>欲界他化自在天王宮中<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>大毘盧遮那天<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>除<sub>二</sub>魔醯首羅難<sub>一</sub>轉法輪、化爲<sub>二</sub>尸棄大梵天王<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>娑婆世界王<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>光明飯世界<sub>一</sub>是名<sub>二</sub>大毘盧遮那天<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>極樂世界<sub>一</sub>是名<sub>二</sub>天王如來<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>師子國<sub>一</sub>是名<sub>二</sub>大牟尼尊<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>大日本國<sub>一</sub>是名<sub>二</sub>大日靈貴豐受皇太神<sub>一</sub>是也、不來不去神、本覺不生神也、一切衆生慈父、常住不變如理也、豎越<sub>二</sub>方便門<sub>一</sub>橫成<sub>二</sub>正寬智<sub>一</sub>

△神風和記 佛神誓別要文

神祇普傳圖曰、夫天照太神與豐受太神則無上之宗神而尊無<sub>二</sub>而<sub>二</sub>故異天下諸社は則天地精明之本源也無相無爲之大祖也故不起佛見法見以無相鏡假表妙體也

○神本佛跡思想は鎌倉末期から盛に見られるが吉田神道に至つて著しく高潮せられた。それは後に論ずる處である。

## 二

○諸神の神宮化

△熊野權現の神宮化

## 1 長寛勘文・・・藤原永範の勘文の一節

又云、熊野本宮者伊勢内宮也、新宮者同外宮也、那智者同荒祭宮云々但所見不<sub>レ</sub>詳・・・

## 2 藤原長光の勘文

據<sub>二</sub>勘此文<sub>一</sub>天照皇太神與<sub>二</sub>熊野權現<sub>一</sub>已以同躰也。・・・

・・・況又天照太神勅曰、夫葦原瑞德國者、吾子孫可<sub>レ</sub>王之地、皇孫就而治焉、寶祚之隆當<sub>下</sub>與<sub>二</sub>天壤<sub>一</sub>無<sub>上</sub>窮矣、今傳<sub>二</sub>天璽<sub>一</sub>之君專守<sub>二</sub>此勅<sub>一</sub>、彌可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>奉仰太神之同躰者也

## 3 江淡抄熊野三所本緣事

## 三

△大神大明神の神宮化へ前出

## 四

△日吉神社の神宮化

嚴神鈔 山王權現鎮座御事

十三日

又大宮權現ハ、本地天照太神ニテ御座也・・・

十四日

一八王子權現ト申ハ、天照太神ノ御子五男三女八王子ニテ御座ナリ・・・

一客人ノ宮ト申ハ、即白山ノ妙理權現ノ御事也、妙理權現ハ、又天照太神ノ母御前

伊弉冉尊ニテ御スナリ

一十禪師權現ハ、天照太神ノ御孫火瓊瓊杵尊ノ御事

五

○八幡宮を太神宮に統一

太神宮參詣記

吾朝ノ諸神イツシカ太神宮ニ奉レ化給ハサリシ、八幡大菩薩ハ宗廟ニテヲハシマス、猶僧形ノ御躰ハ日輪ヲ頂キ給ヘリ、是苗裔ノ神トシテ祖宗天照太神ヲ頂キ給フ、何ゾ況ヤ餘ノ神ヲヤ

六

△春日神社の神宮化

後法興院記 明應四・六・十九條

十九日辛未晴 有風呂心中念誦如例、大祥院被來云、昨日酉刻許前藤中納言室俄有狂氣躰、喰糞敷荒薦有託宣事云々、爲春日大明神由被仰之大祥院余妹可被來之由頻示之、仍而罷出處家門不信之間此兩三年不如所存、來八月タ、リアルヘシ、雖然可致信心之由家門ヘ早々可有傳達、又經ハ免三熱之苦間雖爲殊勝、和歌ハ叶神慮由被仰云々、於所當座百首和歌可有張行、局頭ヲハ家門ヘ可申之、局軸ヲハ我可詠之由被仰之、然者軸之御哥可有如何哉之由相尋處、哥一首被詠之、あふけ人大内山の山もりもわか世中にあらんかきりハとよみて、わか世中ニあらんかきりはといふ詞、伊勢之御哥のやうたりとて人わらふへし、さりながら伊勢と春日ハ更格別ならずと被仰、其後神あからせ給て複(マン)本心云々、雖末代希代事也、彼妻女一向歌道之儀無覺悟仁云々、前藤中納言委細相語之、難盡短筆、神慮尤可奉仰者也、晚景大祥院被歸、後及黄昏有書狀、又如昨日、大明神有託宣云々、早々被相傳之儀被悦思召ト云々、又被詠和哥明日可注給云々、春日社四御殿の女神ハ天照大神と信ぜられてゐたと(雜事記)

永島福太郎 參宮と南都僧化(神社教会雜誌三六ノ二)

七

○皇太神宮儀式帳

一 供奉幣帛本記事

禁斷幣帛王臣家并諸氏之不合進幣帛重禁斷若以欺妄幣帛進人遠波准流罪勘給之

○延喜太神宮式

凡王臣以下不得輒供<sub>中</sub>太神幣帛<sub>上</sub>其三后皇太子若有<sub>二</sub>應<sub>レ</sub>供<sub>一</sub>者臨時奏聞

○太神宮諸雜事記第一 安和二年

安和二年左大臣源高明公被<sub>レ</sub>企<sub>二</sub>謀反<sub>一</sub>之由有<sub>レ</sub>聞天・・・而件謀反企可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>成勢(就イ)一之由日夜朝暮祈<sub>二</sub>禱於<sub>二</sub>所太神宮<sub>一</sub>之由有<sub>レ</sub>其風聞<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>處<sub>二</sub>重科<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣言<sub>一</sub>了・・・右大臣宣奉<sub>レ</sub>勅伊勢太神宮司等取是自<sub>レ</sub>非公家御祈禱<sub>一</sub>之外輒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>臣下

之祈禱一矣・・・

○長寛二年四月廿四日助清原頼業の勘文  
加之神宮禁<sub>二</sub>断私幣<sub>一</sub>忌<sub>二</sub>憚佛事<sub>一</sub>熊野者不<sub>レ</sub>嫌<sub>二</sub>民庶<sub>一</sub>容<sub>二</sub>受緇徒<sub>一</sub>其風乖違其礼懸隔者・・・

○坂土佛大神宮參詣記

當宮(外宮)にいのり申事をば先此大神(多賀)に申せば、此御神又太神に奏し給ふといへり。天子の攝政のごとし。直奏せざる神事、諸社に比例なし。

註一

## 第二節 神宮側の活動

○宇治山田市史

○足代引訓 御師考証同附録

○石巻良夫 伊勢の御師(國学院雜誌二三ノ五・七)

二

平泉先生 中世に於ける社寺と社会との關係

## 第四章 經濟生活

三

第五章に於いて詳述することとして茲でハ略す。  
別例として次のものを掲ぐ

○龍大夫古文書(神宮文庫藏)

貴翰再三令拝見候仰於御神前被抽御精誠一万度之御杖太麻并<sub>レ</sub>御帛<sub>一</sub>壹段被懸御意<sub>レ</sub>恐悦<sub>二</sub>候奉拝領候然而爲最花青銅百疋并爲御遷宮百疋奉進納俱願武運長久家内磐榮之御祈禱奉<sub>レ</sub>懇力望カ<sub>一</sub>外無他事候諸事御使清談<sub>レ</sub>興<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>条不能盡書以恐惶謹言頌

卯月五日

平胤則書判

謹上龍大夫殿貴館人之中

○伊勢古文書集(史料編纂所)

今度出陣武命安全爲祈念一社之造營之事歸朝之上可致成就也仍願書如件

天正卅年二月十五日 毛利輝元 花押

伊勢大神宮 御寶前

これハ御師村山を通じてのものなり

四

佐八文書(神宮文庫)

下野國拝領之内參詣之輩何し其方在所可致定宿也仍如件

永祿四年辛酉

正月廿二日

平政康(景カ)

花押

伊勢内宮

佐八掃部助殿

下野國拝領之内參詣之輩一家々風其外地下人等何し其方在所可致定宿也仍狀如件

永正十一年甲戌

六月十日

藤原忠綱花押

伊勢内宮

佐八美濃守殿

五

文祿三年師職帳

大神宮御師人數之帳文祿三甲午年十月卅日

上之郷

上中之郷

下中之郷

八日市場

曾禰

大世古櫟木

一志久保

宮後西河原

田中中世古

下馬所前野

岩淵

合百四拾五人

此外「諸家師職名録」「諸國御大名持師職名控」「外宮師職帳」等々があるが、これハ江戸時代に入つてのものである。

○御祓賦帳ハ「中國九州御祓賦帳」が享祿五年・永祿七年・元龜元年・天正十四年の四部があるが、未だ十分比較研討を爲せず。

六

○永正記上下（羣書類從）奥書

夫神明快然之祈、天下泰平之政、甚欲勵忠勤倩案事之由、以清淨爲本云々、因以觸穢甲乙假服日限、家々服假令聚之撰之、又可思慮一條々禁斷之法式、爲無相違者、以正直爲先之故也、累葉相承、數卷中遠令抄出之、天地兩卷仁令書焉、是併故三品氏經卿之遺命、蹤跡爾緯起、更以非私曲也、文明年中、以五六箇年事少々増注有焉、茲亦當家從父兄守朝（外宮イ）外姨夫朝敦、共以近代官長賢之勘答等也、其後及度々大亂、兩宮之間尔不思議子細雖見來、以私儀争令書加乎、於廿五六個年以後之儀者略之、顯筆跡一段

（異本ニ據テ別仁）

干レ時永正十年二月九日也 仍號永正記一矣

右件意趣者、爲下興神道荒廢之家、改中神家衰滅之道上、雖下備イ志ニ忠於神明、致中孝於先祖上、愁予守晨既今著禰宜之二座、蒙二祭爵之四品、剩迄レ及二年齡五十、惑天道イ或「異本或天道愚昧文字」一、愚昧之文字、烏焉馬之相違多々、不レ可レ及二他見一、唯偏當家了角イ簡童子等之相副干藺竹馬、爲レ令引乗心於我道而已

第三節 參宮の盛行

大神宮諸雜事記上 承平四年九月御祭條

忽雷電鳴騷天、大雨如<sub>レ</sub>浚參宮人十方(千万イ)不<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>貴賤<sub>一</sub>、恐畏迷<sub>二</sub>心神<sub>一</sub>、退<sub>二</sub>出宮中<sub>一</sub>之間……

同長元四年六月祭の條

忽大雨降天、雷電穿<sub>レ</sub>雲光騷天、天地震動仍參詣衆人迷<sub>二</sub>心神<sub>一</sub>、成<sub>レ</sub>恐之間……

中世に於ける社寺と社會との關係 第四章 經濟生活

梅田義彦氏「縮流參宮志」十、神社協會雜誌三十一ノ三

宮地博士「神道の信仰」國學院雜誌四十八ノ四よりとる。

前者ハ檜垣兵庫家古文書より、後者は櫟木文書より

長享二年三月義政側室大館氏の參宮を拒否す。

大乘院寺社雜事記長享二年三月條

十四日

一 東山殿一對今日參宮、木津船事仰付之、上下三百人計有之云々、傳(轉)害<sub>二</sub>付給、難波來、巨細仰付之

十五日

一 一對長谷寺御下向、上下一宿事成奉書、上衆十餘人分也、馬<sub>二</sub>疋進之、定使<sub>三</sub>三乃公下向了

十六日

一 一對今月長谷寺被座、其故者、**國司方關事不申付之歟**、自國音信無之、先以可有下向云々、執行色々留甲、仍國方<sub>二</sub>使者被立之、珍事不届事也

廿四日

一 一對自長谷寺今日下向、於大和社榼等自東林院遣之

永正六年九月三日、新大典侍勸修寺藤子をして代參せしめ給ふ(實隆公記)

九月一日……新大典侍明後日參宮、自今夜被出精進屋伯二位所(白川忠憲云々

二日辛酉天晴

早朝青女入風呂、新大典侍精進風呂也……今朝一桶荒卷<sub>二</sub>獻、新大典侍精進屋者也……入夜爲新大典侍使、今御乳人三宮御乳母來、國司(材親)過書<sub>二</sub>二百人外不可勘過之由申之、以外事也、雖然既用意之間、可有出立、於路次猶可加問答、其間事内々可被仰、北畠入道其儀(木造)内々、可遣愚狀之由所存也、仍則調置狀獻了

文明十三年伊勢貞陸の參宮に於いて

親元日記

親元日記

三月卅日甲辰天晴

一 就兵庫殿(伊勢貞陸)御參宮之儀、御樽兩種一荷御進上了



四月三日丁未雨

一 兵庫殿御參宮・・・

十三日丁巳曇雨

一 兵庫殿御下向、於路次不慮有御逗留之仔細、令延引候了

大乘院寺社雜事記

四月十六日庚申

一 公方御代官伊勢□□(守息カ)兵庫參宮、於關々不用過書、剩下向道猶以可取之由、支度之間、船ニテニケ上、希代不思儀(議)事也、未聞其例、公義(儀)無正體、作法不可過之

七 永祿記(神宮遷宮記第四卷)

(天文廿四年カ)

四月六日、造宮使殿京ヲ御立、同八日、津迄御着、多氣殿南方役所兔角申、千人計人數通不レ申候故、造宮使殿津ニ御逗留也、然共國司先規無レ例事とて、三百人計通、餘皆舟ニテ參候、權大副殿御舟に召也、同御下向も御舟也、作所へ津より御届、造宮使殿御狀有

八 豐受禰宜等の請を聽し伊勢宮河の新關を停めしむ

(請符集)

進上

祭主卿(藤波伊忠)書狀一通

豐受太神宮禰宜等申宮河新關事副本解

右進上如件

永正十年四月十一日 左大史小槻時元

進上 頭右中將(正親町實胤)殿

宮川新關事

就勢州宮川朝餉新關事、神宮次第令奏聞候之處、雖有子細被引移之、神訴異于他問、停廢事被聞食了、早可加下知之旨、被成勅裁於北畠大納言(材親)入道了、可存此旨由、可被下知之狀如件

五月十六日 右中將

四位史殿

九 大乘院寺社雜事記長享二年二月廿三日條

一 唯心今日勢州下向之由申、國司方入道殿返事申之、給彼使了、自公方國司方被仰出條々唯心相語、  
一 參宮路次關所共立之、雅意以外事云々、御返事、畏入候、國司事小分限事候間、以關務内者共加扶持、可奉公所存也、則此子細代々至當御代經上意御許可、御教書拝領之由申入之

十一 永祿記永祿六年五月廿五日條

上人（清順）多氣より御下、役所九月八日より卅日學候、一定也

十一 外宮引付

天文廿二年多氣天佑勸樂以外之處、太神宮御タ、リ嚴重ニアラハレリ、然者御立願ニ七月廿六日ヨリ、諸海道役所關と(盡)アケラレ、渚口ヨリ旅人參宮數万人其數ヲ不知也、當所富貴上下無申測也、于時一備孝代之

十二

文明二年北畠教具の部下開補某興福寺領大和萩原莊の地を掠め錢を萩原關に課す。六万衆之を憤り、關を閉ちて參宮の路を塞ぎ、之を教具に訴ふ。

大乘院寺社雜事記

四月廿三日

一中御門宰相、並松木等、爲參宮下向萩原關（大和宇陀郡）過書事所望、仍沙汰衆定

源方ニ仰遣之、寺門儀一切過書停止、就中關所代官事辭退云々

六月七日

一自土州御所御書到來、山路息右京助參宮次也

十日

一就宇多萩原關所事、國司披（被下同ジ）官與六方公事到來、仍伊勢詣上下停止通路、

在々所々申付之、以外嚴密云々初瀬路（大和磯城郡）鉢伏兩所被留之、自土州參宮山

路迷惑由申入之、昨日先參詣長谷之處、本來伊勢道者之間、不可叶旨慈恩寺申之押

留云々、自道今日注進之間、長谷寺參詣分ニ可通旨、仰遣慈恩寺方畢、

▲長享二・十二・廿五大和越智家榮・北畠政郷と争ひ、參宮行路を止む。

雜事記 廿五日

伊勢國司與越智公事□（出カ）來、自明日太神宮參詣輩、路次□

（一カ）切止之云々、以外越智惡行珍事、可蒙御罰事也

△延徳元年 大和越智家榮、北畠政郷と争ひ關を設けて參宮の行旅を阻む、興福寺之

を和解

雜事記 二月八日

一就秋山身上事、國司與越智不和出來、仍自舊冬伊勢道止之、此條不可然旨、自寺門

申遣云々

四月十二日

・・・又伊勢道事、國司與越智公事ニ、自越智方參宮者相留、此事申合子細在之間、

定而可爲無爲歟・・・

六月十二日

・・・於通路者、自今日先以爲岸田之意得分開之之由云々、珍重事也

（大乘院日次目錄）

二月廿七日、去此ヨリ伊勢參詣路次、自越智方止之不通、秋山跡事、國司與越智相論、

依之自越智方止之、六万不可然旨、嚴密之評定雖有之、就張本可申所存之由、越智申、

仍止其沙汰、此興云々

六月廿七日 今日伊勢海道開之了

十三

1. 文明十八年八月八日、新大典侍御代官に御參宮（御湯殿上日記 八月七日、八日、十日、十一日、十三日、十四日、十五日、十七日、十八日、九月十二日條、實隆公記八月八日、十七日、十八日、十九日條）

2. 永正六年九月三日 新大典侍（勸修寺）藤子をして代參（註五）

3. 大永八年四月廿七日（御湯殿上日記 大永八年四月廿七日）

4. 御湯殿上日記 享祿三年三月廿三日條

5. 同 同年十月十八日條

6. 同 同四年二月十一日條

7. 同 同五年三月四日條

8. 同 天文三年正月廿八日條

9. 同 同六年正月廿三日條

10. 同 同十年十二月八日條

11. 同 同十二年四月廿日條

12. 同 同年 十一月廿七日條

13. 同 同十三年五月二日條

14. 同 弘治三年八月四日條

15. 同 永祿七年二月八日條

十四

神宮典略後篇將軍家御參宮に據る。

十五

1. 文明十一年九月の參宮

（實隆公記）九月十四日、天顔快晴、今日猶候番武家御臺御參宮、今晚御進發云々、諸人盡美盡善、路次見物衆成市、大樹以下御見物云々

（晴富宿禰記）九月

十四日丁卯晴、公方御臺御參宮、今晚御進發、御供女中與廿七丁、御供衆細川典厩、伊勢守以下及數十騎、御所者比丘尼前行云々

（雜事記）九月廿三日條

御參宮三寶院若君（義覺）御同道御御（比脱カ）丘尼尼御黒女中與共無盡期次第、右馬頭、伊勢守御共人夫數万人在之云々

（御湯殿上日記）九月十一日、十三日、十七日、廿一日條

（菅見記）九月十四日條

（後法興院記）九月十三日、十四日、廿日條

（長興宿禰記）九月十四日條 以下畧す。

2. 文明十六年四月の參宮

（大乘院日記目錄）文明十六年

四月八日、御臺方御參宮云々、御輿舁四人召進之、十五日、御下向云々  
（大乘院寺社雜事記）四月五日、六日、

八日、

・・・御臺御方御參宮

十九日、

一今度御臺御參宮次第、先日興昇召之、相尋之申入分、八日御定、於近江ハ御檣以下御宿ニ進之云々、無殊儀云々、自國司ハ折、御檣風情料足二十貫文持之、是又無殊儀、以外之次第共也、御臺御輿八十二丁、南御所八丁、御共馬上十騎、此外ニ參申輿五十丁、人千人計在之、十五日ニ歸京、輿昇ニハ人別九百給之、路次迷惑之由申入之、…

3. 文明十七年九月の參宮

(親元日記) 九月十日、十四日、十六日、廿二日の條

(氏經日記) 九月十九日條

(後法興院記) 九月十六日條

(蔭涼軒日錄) 九月十五日、廿日、廿二日條

九月十五日、行事如恆、丹、久、悟、昌、盛赴勢宮、蓋明日上様御參宮、依之皆詣也

(大乘院寺社雜事記) 九月廿一日條

一光秀自伊勢昨日下向了、今日參申、御臺十六日御參宮、御出家之用云々

十六

1. 陶弘護の參宮

(陶弘護肖像贊) 泉福院殿前尾州太守建忠孝勲禪定門肖像

辛丑歲(文明十三年) 詣伊勢神宮而秋還上下略全文、十四・五・廿七の條

(参考) 親元日記文明十三年五月廿七日條

一陶尾張守弘護以所々物詣之便、密ニ上洛、彼宿所へ親元罷向勸盃

2. 伊達成宗の參宮

伊達家文書、成宗公御上洛之日記

(文明十五年、十二日カ)

十三日、就參宮、典厩より、国主(国司北畠・長野殿・關殿兩三人へ御狀つかハし候：…十五日伊勢守殿御參宮之御々ハし(過書) 与申候、松岡參候、別出來候、御書日之内出來候事、末代ニ無之候歟、伊勢上野松岡之指南也

3. 土岐頼秀

(碩田叢史)

永正九年壬申二ノ十二ニ、頼秀(土岐)伊勢參宮ス、千五百人ニテ一向ニ戰場ノ出立ナリ、同二十五日皈京矣

4. 大内義興

(伊勢貞親以來傳書)

永正十三年八月十四日、就參宮、從大内左京(義興)大夫殿御尋候間、貞陸(伊勢)へ申、弘中中務五(悉)興兼へし渡し遺之

一主人う内不(つほ)を被付候時ハ、雜色之在所に弓ふくろあるへし、

一社參の當日とて、相替儀有間敷候也、

一大和う内月(つほ)、同鑑之事、以前御尋候つる、遠路之儀候間、爲御用心也、走衆之供衆可被持候事ハ、くるしあらそ(す)候也

一小者六人被召連候事有間敷候

一御社參の當日裏打にて御座候者、房に長刀をは被持候間敷候也

參宮行列ノ次第

小者

中間 中間 中間

小者 雑色こうつほ

小者 主人

厩者 笠持

小者 房長刀太刀

中間 中間 中間

打刀 小者 弓袋

(古記部類) 永正十三年八月十六日、大内左京大夫下著、于當所(興福寺)、宿坊新禪院、參宮云々

廿八日、下向、

其外有名な人で參宮を遂げた人少くないが、その一例として細川政之の參宮がある。

(蔭涼軒日録) 文明十六年八月廿三日條

此日細川九郎(政之)殿參宮、騎馬三十五有之云々

(大乘院日記目錄)

八月廿三日、細川九郎參宮百卅騎云々

(大乘院日記目錄)

八月廿三日、細川九郎參宮百卅騎云々

(大乘院寺社雜事記) 九月三日條

細川九郎自伊勢下向、京著四十騎云々、參詣二百三十騎之由、其沙汰也、母儀

同道輿二十丁十五騎云々

十七

梅田義彦氏「緇流參宮志」神社協會雜誌第三十年六(三十一)年三號

松本時彦氏「僧尼の參宮に就いて」神社協會雜誌第二十九年六號

永島福太郎氏「參宮と南都僧侶」神社協會雜誌三六(二)

樋畑雪湖氏「伊勢參宮と伊勢太々講の起原」

伊勢講に就いて以上のもので出ているもので次の如きがある。

(三宝院文書六十二)

惣寺□□□□□□□□(公物算用狀之事)

納永祿十一戊辰年

三貫卅二文 山沽却ノ代・・・

三百五十文 神明講錢 不動講、分借用之・・・

(多聞院日記) 天正十一年五月三日

一壽福院講親ニテ、伊勢參宮ノ衆定舜房、陽教房、堯舜房、舜賢房、香賢房、轉經院以上七人、今朝与參宮了、人別六石餘ツヽ在之云々、大雨にて迷惑々々察者也、今日

ヨリ一ノ水曜□□三入云々、ソイツレノ衆數多在之云々

十一日、・・・伊勢參之衆ヨリ歸執手色々送來了

十八

耕雲紀行（花山院長親応永廿六年春書之）

しはらくありて宮河につく。こなたの河原にこしをたてゝやすらふに、ふなはしはるかにかけわたして、さかまくなみ、かけまくもかたしけなき神境、信心をこす出家在家、輿をかきならへ、馬を引たてゝ、そのかすをしらすなみたり。みな河なみにおりたちて、行水すめり。

室町殿伊勢參宮記（花山院長親カ）

應永卅一の年極月の十六日の條

宮河を見わたし侍ればこゝかしこに人人なみりたり。

十九

大内政弘、庶人の大神宮參詣に就き、餞送及土産を停む

大内家壁書

參宮人餞送停止事

諸人爲參宮上洛之時、餞送之儀可爲停止之由、自今以後被定御法畢、其故者依人專禮節、可輕 神慮歟、然上者、下向之時、亦土産之儀可爲停止、若不存知之人、有沙汰者、以此旨、不可請 取土産物之由、所被仰出也、仍壁書如件

文明十五年三月九日

廿

永正六年七月十日結城政朝、大神宮に參詣するものに過書を授く

（八槻文書）

從奥州白河參宮方貳百人、馬七疋、荷物八荷、國中諸關舟渡無相違可有勘過之由候也、仍如件

永正六 七月十日

政盛花押

所々領主御中

廿一

1（實隆公記）大永六年

二月廿九日壬午雨降、今日京兆（細川高國）參宮云々

（師象記）二月廿九日壬午雨下、今曉右京大夫入道參宮也、京中并近國貴賤數千人、

付驥尾參宮云々

2（二水記）永正十六年四月十五日

・・・明日右京大夫令參宮云々、仍方々貴賤以此次參宮・・・

3（蔭涼軒日錄）文明十七年九月十五日、行事如恆、丹、久、悟、昌、盛赴勢宮、蓋

明日上様御參宮、依之皆詣也

廿二

（實隆公記）永正六年九月一日、二日、註（五）

（後法成寺尚通公記）

永正十三年三月廿日近衛尚通室參宮に就いて

三月十八日・・・從今日爲精進屋居住新造・・・

（多聞院日記）十六 元龜元年五月十九日條

一禪識房明日ヨリ參宮精進屋へ入トテ礼ニ被來了、同道ノ衆、堯忍房、中藏院、發心院、專識房以下也

## 耕雲紀行

水をくみよせさせて、手あらふ程、皇大神の本誓ニ經咒を誦せず、佛法をいはす、三業をきよめて、一心をたゞしくするのみなりといふ。これ神道にかきらす、まことに佛の一字をとけは、口をけかすこと三十年、自然にわか宗にかなへりとおほして佛とも法ともいはし宮河にすゞきて口のとかはきよめつ

## 室町殿伊勢參宮記

此河にてこりかくと申事は、さしも本説もなきよしを、社家のともがらも申侍るよしうけたまはりぬれども、なを塵勞をすゞぎ、心神をきよめんためにてぞと覺侍れば、人なみに河水をくみて身をきよむ。  
をのづからにこらぬ本の心とはたれ宮川にすゞぎそめけん

## 伊勢參宮紀行（義教 堯孝）

みや川の御はらへなと嚴重におほえ侍て

我君の高きみそきを宮川や（の、イ本）波のしらゆふ千世もかけこせ

さのゝわたり 大永二年 宗碩

けふそ山田につき侍りぬる。予參宮の館ハ網代太郎左衛門尉弘貞所なり。されとこたひは柴屋老人（宗長 參會のためなれば、高向二頭大夫光定所にて、年比のものかたりしつる、やかて千句の有増になりぬ。此法樂はさるころあり「て」（イ本ナシ）官（管カ）領の御發句申いたされ侍り（るに、イ本）、ひとへに天下安全のいのりなるへし・・・

## ○「應仁後記」卷上常徳院殿御政務事 文明十一年

御臺所大方殿ハ同年ノ秋伊勢太神宮ニ御參宮有リ是ハ一天下ノ兵亂ヲ相鎮メラレ度トノ御立願トソ聞ヘシ

## ○「丑槐集」飛鳥井雅康

文明十一年九月十四日、御臺御方將軍家御母儀御參宮とて、柏木の茅屋ちかき所につかせ給しに參り侍れハ、此度の御まいりハ、世のみたれしはしも、しつまるさまにも侍らむとの御願にて、おほしめし立ぬるよし承り侍りけむハ、女房のかたへ申つかハし侍し

世をいのる君かこゝろのまことにや内外の神もめくみそふらむ  
御返し

代をいのるこゝろを神のうけぬとも此ことのはにさらにこそしれ

## ○坂土佛大神宮參詣記

就中當宮參詣のふかきならひは念珠をもとらず、幣帛をもさゞげすして、こゝろにいのる処なきを内清淨といふ。潮をかき水をあびて身にけがれたるところなきを外清淨といへり。内外清淨になりぬれば、神のこゝろと吾のこゝろと隔なし、既に神明におなじ「イしから」バ何を望てか祈請の心あるべきや。これ眞實の參宮なりとうけ給ハリ

し程に偈（渴カ）仰の涙とゞめかたし・・・

○耕雲紀行

程なくやう（まカ）田につきて、まつ外宮にまうつ。御いけの水に手あらふとて、

影なからみいけの水にうつすかないひてかたきそこの心を

れいの禁法なれば、御まへの鳥居の外にて祈念す。

・・・

われいま別に希求の心なし、たゞねかはくは、神明の加被力によりて、膺をさふる物を除却せむことを、行力のよはきみつからはつるところなり。そのうち内宮にまうつ。

みもすそ河にて、

あはれかく人の心をすませはやみもすそ川はいまもにこらす

又いすゝ川を

たれもみな心をあらへいすゝかはなみにいはら神もたのまし

・・・

廿四日、卯のおはり程に、やう（まカ）田をいつ。宮川をわたりて、はるかにかへり申すとして、

天てらすひかりはよもをもらさねは今日わかるとも神は思はし

○室町殿伊勢參宮記

夜ふけてまかりいでぬるに、ことさらの法樂に、寶號を句の上に来きたてまつりて、心ざしをのべ侍らんとばかりに、ともしびのもとにて筆にまかせ侍りて。

なにをかはわがねぎごとゝ思ふべきたゝ神がきにむかふばかりぞ

胸の塵のこさずはらへ神風やいせのちかひにもれぬ身ならば

・・・

うれしさをわが家つとに包むかな頼む神地の山廻りして

（参考）

○南行紀 李由・許六

山田に入て、何がし大夫のもとにつく。日高ければ、參宮の支度して出たり。

抑神前に詣でぬれば、よろづの事は忽わすれて、かたじけなさの一すじに、涙はおとし侍りぬ。

○伊勢紀行 落柿舎去来 貞亨二・三年

衣脱かへかしらなと結て、内外の宮の御前にかしこまり、時うつるまで涙おとしぬ。百二十の社々、たかまか原、あまの岩戸残りなく詣ず。神路山いすゝ川目はなすへくもあらねと、石も木もありかたくのみ覺得て、風景にこゝろよらす。

◎神慮を畏む態度

△耕雲紀行

應永廿五の年仲の秋廿日あまりの比より、れいもをこる脚氣のやまひにをかされて起居もかなはず、枕席をはなるゝ事ならて、なかつの十日にをよひぬ。・・・相府より



御つかひあり。廿一日伊勢御參宮の事あるへし、もし敬神の志あらは、このつゐてに思たつへきにやとなり。ひとゝせ兩度におよひて參詣せしに、たひことに信心まさりて、いくたひもまうてまほしきに、かゝるおほせことは、神慮の感通するにやとおほゆ。・・・十三四日の比より足のいたみおもりて、身をうこかす事もたやすからねは、此事なかはゝ思たえて、神慮にもそむきけりやと、慚愧きはまりなし。・・・十七日、湯よりいつ。足のいたみすこしうすくなりて、心神もいさゝかとりなほす躰なれば。神慮もいまたすてたまはさりけりとたのもし。

△さのゝわたり

さて二日はかりありて、官司大夫(大中臣カ)基長、外宮第十神主常信、易禪禪師、高向二頭大夫光(爲カ)定、これかれひきくして、樽などやうのものをのゝたつさへて、あまゝもみへぬ道の空、ぬれゝ立よられ侍り。さらゝ故郷人のこゝちして、うちかたりつゝ侍るに、今一たび參宮申侍ねかし。さらは爰かしこ、のこりおほき會とも興行すへしよしあれと、今更立かへりまいらんも、神慮さへはつかしき心ちして、たゝこゝなから心閑にと申とゝめて、古ことのもとす多などいひかはしつゝくらし侍るに・・・

廿六

(松本氏年代記)

天文十八巳酉七月廿七日唐船着伊勢五ヶ所唐人二字欠參詣大神宮

(歴朝要紀)

秋七月二十七日乙未明国商船飄到于伊勢國

(續本朝通鑑)

天文十八年秋七月乙未明船漂着伊勢國、而拜大神宮

廿七

細川兩家記下 永祿十二年

一同八月末つかた信長東國勢催、其勢拾万餘騎と言、伊勢國へ被入、合戦度々

雖有之、(神軍侯かイ)國司方勝利を得て噉に形り、信長ハ開陣之由申候、人數

過分死由候形り、

註一

#### 第四節 神明社の創建

渡辺世祐博士「戦國時代の神宮」神道學雜誌第八号

三上左明氏「神明社に就ての考察」歴史地理五十五ノ四

享德神明勸請停止記(神宮文庫)

皇大神宮神主

注進可下早被レ経ニ次第上 奏一被レ停ニ止号下令神名上洛中洛外太神宮勸請一專中御祈

禱上問支

右謹檢ニ旧典ニ系 天照皇大神五十鈴原ニ御鎮坐者 御降臨以前專從ニ高天原ニ下ニ靈寶ニ給下津磐根大宮柱自レ被ニ太敷立ニ以來無ニ其動ニ之處當時辺地遠境移ニ靈跡ニ奉ニ勅

請<sup>一</sup>之条背<sup>二</sup> 神慮<sup>一</sup>者也自然其在所爲<sup>二</sup>勳領<sup>一</sup>時爲<sup>レ</sup>符以<sup>二</sup>末社<sup>一</sup>奉<sup>二</sup>勸請<sup>一</sup>者古今通法也

## 二 太神宮諸雜事記 上

後一条天皇長元四年齋宮頭藤原相通等寮内に荒祭宮高宮勸請するを、荒祭宮の神齋王にかかつて託宣して之を嚴罰せしめ給ふ事

長元四年六月祭條

齋王俄放<sup>レ</sup>音則呼給祭主輔親朝臣遠召須仍祭主禰宜等引率齋王殿參而爰齋王御託宣云、我皇太神宮之第一別宮荒祭宮也而依<sup>二</sup>太神宮勅宣<sup>一</sup>天此齋内親王仁所<sup>二</sup>託宣<sup>一</sup>也故何者寮頭相通并妻藤原古木古曾及數從者共仁年來間狂言之詞巧天我夫婦仁和<sup>二</sup>所太神宮翔付御奈利男女之子共仁荒祭高宮乃付通<sup>一</sup>(イ<sup>一</sup>厶)給也女房共仁和今五所別宮乃付給也止号志天巫覡之事遠護陳天<sup>二</sup>二宮化異之由遠稱須此尤奉<sup>二</sup>爲神明<sup>一</sup>仁毛奉<sup>二</sup>爲帝王<sup>一</sup>仁毛極不忠之企也皇太神宮高天原与利天降御之後人間仁未<sup>二</sup>寄翔御<sup>一</sup>須而件相通夫婦仁件無實之詞稱出天以<sup>二</sup>狂言<sup>一</sup>驚<sup>二</sup>人間之耳目<sup>一</sup>事和甚無礼之企也須<sup>三</sup>一旦仁与<sup>二</sup>神罰<sup>一</sup>也然而爲<sup>二</sup>後代<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>天下<sup>一</sup>仁無<sup>レ</sup>止祭庭<sup>一</sup>仁志天齋内親王令<sup>二</sup>託宣<sup>一</sup>也是則以<sup>二</sup>件相通等<sup>一</sup>令處<sup>二</sup>重科<sup>一</sup>天欲<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>配流<sup>一</sup>也・・・

△延徳元・兼俱謀計に対する神宮側の解狀

延徳引付

皇大神宮神主

注進可早被経次第上 奏被破却吉田之今神明、於兼俱卿者、一段預御糺明彌專天下泰平國家安全御祈禱間事

右太神宮御神躰、飛御坐吉田之由、就兼俱卿注進則、禁裏様有御拜見、剩其儀爲勿論之由、被成下綸旨勅書等云々、爲事實者、言語道断次第也、抑天照大神自高天原、於下界可有御鎮座地視給、下賜五十鈴之靈寶、則相留當宮、今之五十鈴川、如是神代自天上定御坐、當宮清浄之靈地、何爲下七社飛御吉田矣、不享非例(礼)者也、併彼兼俱卿爲虚言者哉、奉輕神慮之條以外子細也、然預許容之條、神慮難測者也、所詮不日被召返被(?) 綸旨勅書等者、止神宮愁訴弥可奏抽御祈禱之忠節者也、仍注進言上如件以解

延徳元年十二月

大内人正六位上荒木田神主定治上上

祢宜從四位下荒木田神主守朝

以下八人

其他「諸國神明勸請停止例」「諸國神明禁止例文」「諸國神明勸請御禁制之例」「享德神明勸請停止記」(以上悉く神宮文庫藏)に詳し。

## 三

大乘院寺社雜事記 延徳元・七月十八日條

一天照大神者丹後久世戸ニ飛終之由衆人申之  
廿五日

一伊勢國司山田下(外)宮發向事、廿四日、廿八日兩人勢共押寄云々、天照大神ハ丹後世戸ニ渡給之由一夫申之云々、不思儀事也

延德元年己酉春三月某日、伊勢外宮神寶降于吉田齋場所、冬十一月某日內宮神寶復降矣、前後皆在夜參半、風雨晦冥、黑雲八道夾光而下、至地如燃著、夏聞于朝、有旨神輿入內、天子下階迎之、神道宗元卜部二位兼俱侍之、睿覽惟謹、遂命秘之吉田大元宮云、二年庚戌冬十一月釋某諸神宮(吉田社)者七日、梅叔藏主相從、日々乞題賦詩、始于凡取經歷者終于心之所欲、故以其韻

伊州連歲火于祠 猶有愚民爭土宣

衛護皇居去天咫 雲車一夕入京師

詣 吉田太神宮

今伊勢宮神社文書集(広島縣沼隈郡神社鏡山鎮座今伊勢宮社務所所藏 臨時大神宮史編修部影守本に據る)

神明宮再建立記

火災之所發者自然之數而神不能禦之況於人乎粵文明九年丙申秋八月十三日巳時人家失火此家一時爲灰災及三社廟一信秀不能禦之諸人亦兇己財而唯災及三神廟一悲之雖三神不能禦之青石遠(ハルカニ)飛而自避災火矣誠神德之靈妙可威乎哉信秀不愛身命不惜貨財經營三年而成矣文明十一年戊戌冬十一月十六日卯時奉遷宮即奏揚立計樂一夜猿樂一日(猿樂師弥大夫)奉祈天下太平諸民安樂

神主中村六郎左衛門藤原信秀

續神主 嫡子

光秀

○今伊勢宮神社文書集

今伊勢宮神明緣起

泉州堺庄主荒木田大夫平朝臣末次詣伊勢太神宮誠心精一奉祈神德一七七日七夜至其滿曉有夢告焉此日應永三十三年丙午春二月三日也其神告曰汝曾信我深矣切矣由是今我子汝汝尋我於華表左右有青石一即是我也汝懷之而歸本庄立祠祀之必得福焉末次奉從神告顧華表之左右則左砦上有青石一長五寸許而有光輝末次頓首百拜乃供奉歸於泉州堺本庄立祠祀之二三年于茲矣應永三十五年戊申春正月二日曉又有夢告其夢告曰此地異怯盛行而傳經之聲(カマビスシク)耳梵鐘之響躁心非清靜無爲之地也從此西方有佳地焉汝懷我而行至於其地即我示汝於是末次再從神告出撰津國過播磨國一經一歷備前備中一雖雖然無更驗矣始至備後國沼隈郡神村末吉鏡山麓宿矣欲去旅舍皆重而不立足屈而不行乃知是神明所欲住之地也領主野氣治掃部聞之立祠祭之即從神告奏號今伊勢神明宮環鏡山十九町一者以爲神地一日後世子孫勿畝侵神之地乃命末次爲神主以司祭禮云々爾來日夜千億萬人遠近無隔日詣祈福無不驗矣應永三十五年戊申春二月三日外宮成矣正長二年己酉夏四月內宮成矣謹書始末以爲記耳

平朝臣 末次敬白

○高嶺兩太神宮御鎮座御傳記（山口縣史編纂所定本）

就 神明御勸請之御社壇御建立之作事方種々調等事

惣奉行 弘中越後守武長

熊野三郎左衛門尉貞氏

作事奉行 中山左馬允資賴

皆木修理進勝章

普請奉行 福嶋右京進親長

野原三郎 有祐

一於當國周防山口縣御勸請事御在京折節内々有御宿願歟永正十五年戊寅從京都御下向之十月五日山口御著仍御社壇可有御建立宮地事被仰付之被令見之處高嶺麓正法院敷地可然在所云々正方向也南ハ有小崩（山明）也今觀音堂再興之西ハ高嶺峨々として元觀音堂舊跡嚴嶺在之北ハ深山遠くめぐりて法泉寺香積寺山所々につゝくしかるに同十月廿六日關京御出有て御歴覽之處古寺之砌曠々多り石清水湛々として無増減岩ほならひていさきよし殊にハ本社祭禮等に用らるゝ草木まで天然有と云々早く地形を引とゝのへ御社壇御建立の事可相催之由被仰出畢

一同十一月三日御宮地尺杖を打榦を立四方に注連を曳之今八幡神子左馬大夫貞重祇園大宮司調之

一同十三日御新初在之爲御名代右田左馬助興安并武長參候之・・・

・・・中略・・・

一御作事初之儀吉日良辰事對壽星庵周眞一色殿家齋藤名字如勘進之（永正十六年）同八月廿九日庚寅卯剋初之瓶子昆布勝栗等三獻調之

・・・中畧・・・

一外宮立柱事同十月十日辛未剋雨任壽星庵勘文之旨立之御祝儀昆布勝栗餅雜煮瓶子等出之其後酒飯點心已下悉祐覺房調之社家神子衆各罷出之至同十一月三日關京外宮御宮作悉御造畢也同四日 御出所々宮造被御覽畢

・・・中畧・・・

一内宮御作事之儀去年永正十六以來御材木少々相調之當年永正十七從二月廿六日乙酉作事初之御祝儀等如右也

・・・中畧・・・

一内宮立柱吉日良辰事京都より去年永正十六十二月廿五日下午向之國書頭在康前圖書頭在京三男、任撰進勘文之旨同十七年三月廿一日巳酉剋降雨立之御祝儀事去年、外宮立柱如御祝儀十穀祐覺房執調也至同四月八日悉御造畢也

・・・中畧・・・

一神明御勸請事去年永正十六本社御師高向二頭大夫名代河村二郎左衛門殿罷下之時被仰付之處申分聊有相違之儀歟去春對吉田神主以飛脚永興寺々僧被仰上之處御勸請之趣國家御安全御武運御長久御爲旁被成其心得之由被申下畢然者御神體御下向之并御社壇御かさりの次第條々以目錄言上のあひた則其入目等可被調上之由被仰出之砌號御禮高向二頭大夫光定本國を卯月十三日發足せしめ同六月十二日山口著之同十六日遂出頭懸御目畢仍、神明御勸請之儀可遂其節之由就言上之儀に其儀式をとゝのへ同廿六日より光定參籠せしむるあひた新調棧敷をかまへ、御遷宮之儀相調

之同廿九日乙酉亥剋執行之、御屋形様、介殿様御兩殿様御社參之同劔役杉六郎興綱安富遠江守行秀兩人なり供奉衆**陶尾張守興房**杉兵庫助興重・・・以下諸人供奉不知其數・・・御遷宮以後神前江御社參ありて丑刻（剋）御歸館なり次御方々様より御折紙御進獻也次面々衆近習衆其外分限衆御太刀一腰宛同御神馬料員數隨其分限被相定也、已上**御馬新勘合辻二萬疋云々二頭大夫に給之**其外諸人參詣之絹布米錢其志な／＼其人の志に任せ進獻之**二頭大夫同潤六月二日下向也**暫宿牧牛院也御遷宮之儀式**二頭大夫記録在別紙**

・・・中畧・・・

一防長兩國萬民信心の志の爲に紙袋を郡々に被支配了次豊筑兩國へも同被配當之由被相催云々

永正十七年（庚辰付箋なし）潤六月下旬注之

（誰が記録したかは不明）

○高嶺太神宮由緒書（松田顕業、―幕末明治初年の神主―の記）

一勅額之事

後柏原帝 震筆

右勅額之由縁ハ明應貳年足利義植公大内義興公農武威を御頼にて山口へ下向有之永正五年、義植公將軍御復任之事をへて義興公の武威に依る也其儀委く不能申其後永正十五年迄義興公京都執權職御勤被成候その御在京之節御宿願有之歟御勸請之事被仰願猶勅額之義も御願相成候迄と相見へ候神社啓蒙諸社一覽等之書籍に者從三位左京大夫多々良義興依夢覺而勸請之所祭也神躰同伊勢兩宮と相見つ申候御勸請當前者高嶺神明と可奉觸之旨被仰出追而、勅額被**指下たる**高嶺大神宮と被稱**候**依之諸國にも無比類勅願所と奉仰候義ニ御座候大被下置候年月ハ相分不申候右之御額被下候節將軍家より**茂御故書**御詠歌等被下候之由と御座候得とも御**尚書**茂御短冊も一向相傳ハり不申候

高嶺神明社に対する大内氏の崇敬并毛利氏の崇敬更及一般領民の崇敬ハ可成りなものであつて、これによつても中世より近代初期にかけての大神宮崇敬思想の普及を見得るが、甚だ厖大なる紙面を要するので全部省略した。

## 第五節 神領寄進

勢州記録 後鑑六十九所載

伊勢國員辨郡之内高嶺之事、天下静謐之間、大神宮御寄進候、全領知可被執沙汰之由、所仰出候也仍執達如件

應仁二年六月廿三日

親元（蟪川）判

造宮使

範眞版

二

内宮神官所持古文書

永奉寄進皇大神宮江下地事

合壹段半者 在安藝郡林東庄之内字南谷、マタ上方九斗、加地子ハクター、麥三石六（大カ）麥事也、升者賣買也

右下地者、内宮一神主殿御祓散供米、且者御供料進度候、於向後者、守晨神主子孫爲神役間、尤可有御知行者也、此面違輩出來者、訴訟時公邊處罪科人者也、爲末代寄進狀如件

文明四壬辰五月三日

永源庵 慶了判

渡部四郎五郎判

林東庄内南谷マタ一反半寄進狀事、仍御禮錢十六貫文うけとり申者也

文明四壬辰五月三日

渡部四郎五郎判

同 永源庵判

豊正大夫守晨神主

三

伊勢古文書集（二ノ下）

大神宮御寄進之事

合田地五反太刀毎年一腰

御太刀者十ヶ年之間

一在所越後國久引郡西濱布川之保

み（西カ）小味御年貢五貫

右爲御祈禱料千秋万歳可讓申之田也仍執達如件

明應七年潤十月吉日 上杉シヤ（房能）

御代官泰祐花押

藏田が書中にある故御御師藏田を通じてのものであらう。

四

内宮神官所持古文書

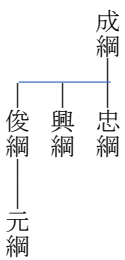
氏家郡之内栗嶋郷之夏忠綱任寄進旨猶向後不可相違候尚以被者可爲快悦以仍狀如件

天文四年乙未十一月三日

藤原俊綱

内宮佐八与次殿

宇都宮系図



五

○佐八文書

岡本郷之内石關參貫文之所、永代爲伊勢大神宮御領、奉寄進御祈念頼入候仍狀如件

德雪齋

天文廿辛亥十一月吉日

周長花押

栗野弥四郎大夫殿

六

○佐八文書

寒川之内千疋之所、宿願付而令寄進候、武運長久當城繁榮之被抽精誠候者、尤可爲  
大懽候恐々謹言

永祿五年壬戌正月十三日

(下野小山秀綱)

秀綱花押

佐八掃部大夫殿

七

○伊勢古文書集一下

合壹段者在江州淺井郡青居竹内字マングラ前東ノ繩手壹段也内德分拾貳合捌斗、上分□村千七合五

勺升ニテ五斗貳升有之、此外萬札(雜)無公事也

右件田地取(元)者南部秀就先祖相傳之雖爲私領、依有立願之子細、伊勢大神宮以奉  
寄進處實正明白也、本證跡雖可相副、一亂紛失之條、以新券文寄進之上者、右之於  
田地子々孫々後々□末代、違亂煩不可有他紛者也仍而爲後日永代寄進之狀如件

施主南部新右衛門尉

秀就書判

永祿拾參年卯月三日

伊勢御師山田上部大夫殿々々

八

○伊勢古文書集三上

奉寄進田地之事

三反サルハシ 四反馬アラ井ノクチ 三反宮谷稻場ノ八十

以上壹町代方壹貫文

爲義景國家安全武運長久子孫般(繁)昌爲祈禱寄進申者也

貳反カイハミ 壹反地藏カ市 壹反イ、カ谷 大同所

以上五石代方無之

景遐并子共家來人爲祈禱ニ候間、元日ヨリ五月九月兩三度小神樂參、二世安隱(穩)  
武運長久之可有祈念者也

右祈(寄)進狀如件

元龜元

朝倉治部丞

六月十六日

景遐判

西村八郎兵衛尉殿々々

九

○伊勢古文書集三上

一上條之保飯坂村之内八拾俵壹斗五升但此内引物如前々之

一同保同村之内六十八俵此内引物如前々

一小出之保高寺村内三俵之所

一佐美郷浦山本光院方之内屋敷□□□武(貳)十在之所

一藤之保折立村内禪德寺

以上

右所奉寄進者也仍如件

元龜元年

十二月十三日

(河田)長親花押

十

○伊勢古文書集一下

御伊勢キシシノ狀之事

合一段者

在江菟淺井郡速水河辺庄之内字土北郷德分納參俵永代 大神宮キシシ申也本証文  
相そへ可申入つ一亂見うしない候間此表を以可有御知行違亂煩有不□□(不明)候  
爲後曰如件

元龜貳年

今井慶十郎

二月十一日

書判

御師上部大夫殿

十一

○伊勢古文書集二ノ下

於御神前御立願之事

御供田合百俵之所

右御き(當)いんのおもて無別儀智行いたし候ハ、永代進上可申以神慮之儀以間少も  
相違有間敷候

瓜生宮内助

天正三年二月二日

書判

大神宮 參

十二

○伊勢古文書集一下

永代奉寄進私領田地之事

合壹段者在江州淺井郡壽石郷字うつき町東壹反之德分拾斗五升也又字イタヤ東五反目壹反之德分八  
斗也并□□方四斗貳升有也此外万雜無上事

右件田地辰子世丸爲祈禱永代御きしん事處實正也仍而爲後日狀如件

今村與次郎

天正六年九月吉日

長治書判

伊勢上部大夫殿 參

十三

○伊勢古文書集二上

1 天正拾年の寄進狀ハ本文に載せたり

2 天正十一年のもの

伊勢大神宮

奉寄進知行之分

一 苜屋原(東筑摩郡)之内にて

拾貫文

一 塔原同赤科にて

二十貫文

一 田澤にて

拾貫文

以上合而四拾貫文之所

右御祈念之趣(旨)者息災延命、同藤女壽命長遠、付者武運長久、軍陣勝利。知行  
重々、家風豊饒、所求円満如意吉祥、精誠之趣如件

天正十一年正月

青柳伊勢守

壬丑月十六日

藤原頼長◎(朱印)

花押

宇治殿 參



○稻葉家譜

(天正十一年)

七月、一鐵寄進新地於伊勢太神宮、其証文曰、爲御初尾新地寄進在々所々

江里方

- 參貫文 北方
- 貳貫文 土秋(揖斐郡)
- 壹貫文 莚田(本巢郡)
- 壹貫文 生津(本巢郡)
- 五貫文 木田(稻葉郡)
- 參貫文 別府(本巢郡)
- 壹貫文 有尾
- 壹貫文 牧田
- 五貫文 武義
- 壹貫文 小嶋右近
- 參貫文 揖斐(斐)右近
- 壹貫文 小柿右近
- 壹貫文 西郷(本巢郡)
- 壹貫文 外山(本巢郡)
- 壹貫文 十七條(本巢郡)
- 以上

給人方

- 貳百疋、石谷(稻葉郡)、下眞桑(本巢郡)、外山、福地 給 那波和泉
- 貳百疋、五ノ里東北院(表佐笠毛之内) 古江賀兵衛
- 貳百疋、河崎之内口分、長松 稻葉土佐
- 貳百疋、文除(本巢郡)、櫻大門(揖斐郡)、 佐藤出羽
- 加<sup>満</sup>(十九條)ノ内笠毛方 稻葉新三郎
- 貳百疋、古橋(本巢郡)、
- 以上

合五千疋

似齋

天正拾壹年七月 日 一鐵 在判

上部大夫殿

○御証文集○笠系大成附錄所収

去頃○神宮文庫所藏三方会合所引留此二作入不慮之本意偏太神宮之御加護候、○貞慶松本二入  
 ルコト十年七月十七日老父長時、又者自分ニも依令立願、次柳之郷百貫文所令寄進候、彌  
 以御<sup>心</sup>(慰)志、武運長久、子孫繁昌、國土安全之御守護奉迎者也、仍如件

天正十二年甲申卯月十四日

貞慶花押

太神宮之御師

榎倉大夫殿

右勢洲御師榎倉鞞負武周家藏

十六

○伊豫古文書集

福島正則之古文書

爲御祈念御神江上申<sup>々</sup>(与)州北条村之内知行之事

高合百石

右之内当物成

米六拾石壹斗五升

ㄤ ? 貳石壹斗

物成合六拾貳石貳斗五升也

天正八年(十八年か)十二月七日

福島左衛門大輔

正則

上部越中守殿

爲上様御祈禱与州以北条内御神様江御行百石進上仕候毎年可被召置者也仍如件

天正拾八年

福島左衛門大輔

拾二月七日

正則

上部越中守殿

御神様へ進上以知行百參拾石之中嶋郡七寺之内を以進上候太閤様御膳様御祈禱二百石殊分者我親子爲御祈禱進上以於神前弥御祈念頼入、恐々謹言

福島左衛門大夫

文祿四年

正則

十月八日

上部久八郎殿

十七

○伊勢古文書集(三上)

爲神領參州寶飯郡川原郷内貳百石進之候全可有社納者也

羽柴三左衛門尉

照政

天正十九

十二月九日

上部久八郎殿

十八

○伊勢古文書集

赤穂郡高田之内宇治山村宿村以兩所都合四百合(?)令寄進畢全可有社領者也

慶長六年

十一月三日 (池田) 照政判

上部久八郎殿

十九

○伊勢古文書集

土州大守之古書

伊勢大神宮爲社領吾川郡畑村三而合百石令寄進之也

慶長九年

山内土佐守

正月廿四日

一豊判

上部久八郎殿

(山内年代略記)

慶長九年甲辰吾川郡畑村ニテ伊勢神領百石御寄進

廿

○(内宮神官所持古文書)

大神宮へ御寄進之事、我爲知行方佰分一神納可申、右末代相違有間敷候以上

慶長十年

松岡市右衛門

霜月廿八日

定正判

中河大炊助殿 參

廿一

○(伊勢古文書集)

大神宮爲御領、上美郡吉成之内を以百石致進上候、彌於御神前御祈念奉仰候、恐々

謹言

慶長十二年三月廿五日

池田次兵衛

長幸判

御師

上部久八郎殿

廿二

○(伊勢古文書集)

於淡路國知行百石令寄進候、永可有御社納者也仍如件

慶長拾五年

十一月三日

輝政判

上部左近大夫殿

廿三

○(伊勢古文書集)

播磨國赤穂郡高田之庄宇治山村内貳百石之地大神宮以奉寄進畢、永可有社納者也仍如件

慶長十八年十二月四日

忠繼判

上部久八郎殿

忠繼之御書

津名郡室津庄里村之内を以高百石令寄進訖、永可有御社納者也

慶長拾八年

正月十一日

忠繼判

上部久八郎殿

廿四

○(伊勢古文書集)

爲大神宮領饒東郡平野村内三百石令寄進畢全可有社納者也仍如件

松平武藏守

玄隆判

慶長十八年十二月廿五日

上部左近大夫殿

廿五

○(伊勢古文書集)

因州大守之古文書

爲 大神宮領伯耆國河村郡田尻村内を以參百石奉寄進訖全可有社納者也

元和四年

幸隆

十一月廿六日

上部久八郎殿

此外、天文三年九月十六日、齊藤左近大夫利政の寄進狀(佐八文書)、永祿二年霜月十三日与語久兵衛の寄進狀(伊勢古文書集三上)、天正八年十月廿四日建部久左衛門のそれ(伊勢古文書集三ノ上)、丹羽半左衛門の天正十八年八月廿日の寄進狀(伊勢古文書集二ノ下)等偶目するもの少なくなく、更に、社会經濟史学八ノ二「戰國時代に於ける神宮と中国武將」(吉村宮男氏)によつて、毛利家の寄進、又、「島津國史二 十三慈眼公上」によつて島津家久の百石を伊勢太神宮社領として、その寄進狀を御炊大夫に与へた事等があるが、これらの精査ハ後日に譲ることとし今ハ大体の傾向を見るに止めた。

廿六

○神封通考 御巫清直

此外ニ神領トシテ將軍家ヨリ朱印ノ証明ヲ賜ハリ伊勢、美濃、越後等ノ國々ニテ收納スルアリ、惣高千八百五十石ナリ、春木・山本ノ兩御師職ト上部・松尾・福嶋・丹藏ノ四家コレナリ、其領地ノ雜勢收納等ノ事神官ニ預ラス、其家ニヨリ支配シ來レリ又諸國ノ大名家ヨリ己ガ師職ニ宛行ハル、神領アリ、其惣高六千餘石アルヘシ、其納米ハ元ヨリ師職ニ附セラレシ祈禱料米ナレハ各其家ニ領納セリ

廿七

○秀吉の上部大夫へ与へた扶助高

(伊勢古文書集)

國<sup>ぬ</sup>(坂)之内海<sup>も</sup>も<sup>ん</sup>えん

(武知) 藤三郎分百石令寄進候可有全領知狀如件

天正貳

羽柴藤吉郎

八月一日

秀吉御書判

上部大夫殿まいる

大神宮へ御初尾として福永之内を以百石分引分進獻候者御意得あるへく候恐々謹言

天正七

羽柴藤吉郎

二月三日

秀吉御書判

上部大夫殿御宿所

丹州船井郡山内庄内貳百五拾石事永代宛行畢可全領知之狀如件

天正十一

八月朔日

秀吉 御書判

上部大夫殿

伊勢国多氣郡相可内千石之事令扶助之訖全可領知者也

文祿三

九月廿一日

御朱印

上部大夫とのへ

以上千四百五十石以上、これらハ純然たる御師への扶助料を示す。

廿八

○織田氏の神領保護

(伊勢古文書集) 一上

信長公御高札

多藝庄椿井郷

當郷之儀依爲、太神宮領伊勢寺内相構之旨得其意候然者陣取放火濫妨狼藉其外伐採竹木事非分族申懸之事一切令停止事若於違背輩者可加成敗者也仍狀如件

永祿十年九月 日

信長御判

織田城之助様御判札

一多藝庄椿井郷伊勢太神宮領従前ニ今以如在來無相違可令所務等事

一伊勢寺内陣取放火乱妨狼藉其外不可伐採竹木事

一理不盡使非分族一切不可申懸事

右條ニ若於違犯輩者可如成敗者也

天正九年三月日 城之助様御判

福嶋四郎右衛門とのへ

一多藝庄椿井郷伊勢太神宮領自前ニ如在來今以無相違可令所務事

一伊勢寺(飯南郡)内陣取乱妨狼藉其外不可剪採竹木之事

一理不盡使非分族一切不可申懸事

右條ニ若於違非(犯カ)輩連可如成敗候也

天正拾年十月日 三七様御判

福嶋四郎右衛門とのへ

○伊勢古文書集二ノ下

中納言様御朱印

伊勢領之事如前之停止諸役郡司可爲不入者也仍而如件

天正拾貳年

御朱印 拾月十日

御師 藏田左京亮とのへ

其他、かゝる神領保護の例ハ少くない。

第四章 神宮の復興  
第一節 神宮復興の志

註一

○戰國時代に於ける天下静謐の御祈り

○應仁元年正月十一日

(内宮引付)

天下静謐御祈事可抽精誠之由可被下知二宮之旨自廣橋(兼頭)殿所被仰出也仍狀如件

正月十一日 神祇大副(藤波清忠)判

大司宿館

○應仁元年五月

(内宮引付)

一兵革(只今)急速静謐事爲公武御祈則可抽丹誠之由可令下知兩宮給候旨被仰下候

謹言

五月廿九日

(町)資廣

祭主二位(藤波清忠)殿

○文明二年三月天皇、法皇宸筆の心經を納め三合の祈禱を行へせ給ふ

(伊勢古文書集)

院宸筆後經並武家御願書等爲三合御祈禱被奉納也、宣奉祈聖算長久武運安全殊兵革静謐之由可被下知而兩宮之旨被仰下也謹言

三月九日

(柳原)資綱

祭主三位(藤波秀忠)殿

○文明二年六月

(内宮引付)

一御敵等少々參御方之間、御大慶候然間別而彌可抽丹誠之由被仰出候此旨可被下知

二宮之狀如件

六月二日

神祇權大副(藤波秀忠)在判

大司宿館

○文明二年八月

(内宮引付)

一就兵革亶近日殊凶徒等結黨亂入処々云々、所被驚思食也、仍誅罰不廻踵之様、可抽御黨禱精誠候由、可被下知兩宮之旨被仰下候也、謹言

八月四日

祭主三位殿

○永正四年八月

(宣胤卿記)

近日兵革連續、洛中不穩、庶民之愁歎、頗驚叡聞者也、宜抽天下和平、朝家安全之懇祈之旨、可令下知神宮給者依

天氣言上如件、秀房誠恐頓首謹言、頓首ハ、依長者一段禮也

八月四日

左兵衛佐秀房奉 日付遅々如何

進上 中御門大納言

二

○朝家復興朝儀再興の御祈り

(實隆公記) 明應六年十月十五日條

近日公家零落以外事也、別而可抽懇祈之由可仰神宮云々、此旨同申遺宣秀朝臣内々書狀也

○明應七年潤十月廿八日條

抑御祈事近日被仰所々云々、御教書廿七日到來

廿八日書一通神宮奉行職事也遺頭弁了

天下安全朝儀再興御祈事、從末月四日十七ヶ日殊可抽精誠之由可令下知神宮給之旨、

天氣所候也仍言上如件尚頭誠恐謹言

後十月廿七日 右少辨尚頭奉

進上 侍從大納言殿

進言上

天變地動及度々、殊可抽精誠之由、同可令下知給條也、重誠恐謹言  
これらハ極く一例に過ぎず。

三

○天變地異等の御祈り

一應仁元年三月、變異祈禳(内宮引付)

一應仁元年四月一日、月星の變祈禳(大日本史料八ノ二)

一應仁二年九月十六日、彗星祈禳(大日本史料八ノ二 九八)

一文明三年五月十四日、地震祈禳

一同 七月廿八日、星變祈禳

一同 十二月四日、彗星祈禳

一文明四年正月廿四日、内侍所鳴動祈禳

一同 七月卅日、流星祈禳

一文明六年二月八日、惑星祈禳

一文明七年三月七日、火災祈禳

一文明八年六月十六日、地震祈禳

一文明十八年三月十七日、變異祈禳

一延徳三年六月十八日、星變祈禳

一明應二年十一月十四日、地震祈禳

一明應六年三月十六日、三合厄祈禳

一明應七年十一月四日、天災地變祈禳

一明應八年五月十四日、二星合祈禳

一文龜元年七月廿六日、炎旱により祈雨

一同 七月廿七日、星變祈禳

一文龜二年正月九日、同前

一同 七月廿六日、祈雨

- 一同 八月七日、變異祈禳
- 一文龜三年八月十九日、天變飛妖祈禳
- 一同 九月廿日、星變祈禳
- 一永正元年潤三月六日、祈雨
- 一同 三月十五日、月日薄蝕祈禳
- 一同 八月十五日、星變地震祈禳
- 一永正二年正月十八日、才厄祈雨
- 一同 五月廿日、天變祈禳
- 一同 十月三日、變異祈禳
- 一永正四年二月十二日、地震祈禳
- 一永正五年三月廿五日、火災祈禳
- 一永正六年三月七日、雷鳴地震祈禳 大日本史料九ノ一 六八二
- 一同 五月廿六日、變異祈禳 大日本史料九ノ一 七三八
- 一同 八月三日、炎災祈禳 大日本史料九ノ一 九〇二
- 一同 十一月十一日、變異祈禳 大日本史料九ノ二 七二
- 一永正七年五月七日、祇異祈禳
- 一同 八月八日、地震二星合祈禳 大日本史料九ノ二 八二二
- 一永正九年六月十八日、地震及禁中怪異祈禳 大日本史料九ノ四 一四三
- 一同 八月七日、變異祈禳
- 一同 十二月十一日、二星合及變異祈禳 大日本史料九ノ四 三〇四
- 一永正十年三月十八日、變異祈禳
- 一永正十一年九月五日、天變地妖祈禳 大日本史料九ノ五 三四一
- 一永正十二年四月十七日、祈雨 大日本史料九ノ五 七二
- 一永正十五年八月五日、止雨
- 一大永二年九月、 變異祈禳
- 一大永五年五月十一日、天變祈禳
- 一大永六年八月廿一日、星變祈禳
- 一享祿四年五月三日、彗星祈禳
- 一同 八月三日、疾疫祈禳
- 一天文三年五月廿九日、同前
- 一天文九年三月廿五日、疾疫祈禳
- 一天文十一年正月廿八日、三合祈禳
- 一天文十四年六月十日、祈雨
- 一永祿三年四月廿五日、災異祈禳
- 一同 五月廿九日、炎旱御祈
- 一永祿四年五月、 天變御祈

以下畧

四

○朝廷に於ける神宮御法樂

- 一文明九年四月廿九日勅題による法樂和歌



- 御湯殿上日記(四月廿九日、五月七日) 親長卿記(四月廿九日、五月五日、五月七日)
- 實隆公記(五月一日、五月五日)
- 一文明十七年三月廿一日法樂連歌
- 御湯殿上日記(三月廿一日) 吉田兼致卿記(三月七日)
- 親長卿記(三月十七日、三月廿一日) 新撰菟玖波集」
- 一明應七年五月十一日、和歌、御湯殿上日記
- 一永正十二年八月十六日、皇太神宮法樂舍千佛勤進に、御太刀を奉加あらせらる
- 「守光(廣橋)公記
- 一大永五年十月十四日、法樂連歌
- 「實隆公記」十月十四日條 「二水記」十月十四・十五日條
- 一享祿二年四月廿二日、法樂
- 二水記 四月廿二・廿三日條
- 一天文二年八月十二日、法樂百首の御當座
- 御湯殿上日記 八月十二日
- 一天文二年十一月十六日、御夢想により法樂連歌
- 御湯殿上日記 十一月十六日
- 一天文五年九月四日、法樂百首の御當座
- 御湯殿上日記 九月四日
- 一天文十年五月廿八日、御夢想神宮御法樂
- 御湯殿上日記
- 一同 十二月十三日、法樂和漢の沙汰
- 御湯殿上日記
- 一天文十一年七月廿八日、御心願の法樂(御湯殿上日記)
- 一同 九月廿一日、御湯殿上日記
- 一天文十二年二月十九日、神宮法樂千句
- 御湯殿上日記二月十九・廿・廿一日
- 一天文十三年八月四日より廿九日、御湯殿上日記八月四・八・廿一・廿九日
- 一同 九月「千句」御湯殿上日記九月一・二日
- 一天文十四年三月十二日、千遍の御樂「御湯殿上日記」
- 一同 五月廿一日、千卷の心經「御湯殿上日記」
- 一同 十一月四日、御當座「御湯殿上日記」
- 一天文十六年六月十七日、御連歌「御湯殿上日記」
- 一天文十七年三月廿九日、御常樂
- 「御湯殿上日記」「言繼卿記」同日條
- 一同 五月廿一日、御樂百遍「御湯殿上日記」
- 一天文十九年三月五日、御夢想連歌 「御湯殿上日記」「言繼卿記」
- 一同 八月十五日、千句 「御湯殿上日記」
- 一同 十月廿八日、御千句 「御湯殿上日記」
- 一天文廿二年十月十七日、百首の御哥「御湯殿上日記」
- 一同 十一月、御千句 「御湯殿上日記 十四・十五・十六日」

- 一天文廿三年三月廿六日、御連歌「御湯殿上日記 廿六・廿七・廿八日」  
 一天文廿四年三月、御千句 「御湯殿上日記 廿五・廿六・廿七日」  
 一弘治三年八月、御千句 「御湯殿上日記 廿六・廿七・廿八・廿九日」  
 一永祿六年二月九日、天下の御祈禱とて千遍の御常樂  
 「御湯殿上日記二月九・十・十一日」 「言繼卿記二月九日」  
 一同 九月廿三・廿七日、御發句 「御湯殿上日記」  
 一永祿七年二月廿一・廿二・廿三日、千遍の御樂(五常樂)  
 「公卿補任」 「御湯殿上日記」

五

○神宮奏事始が如何に眞劍に考へられてゐたかの一例は  
 1 (實隆公記) 明應七年正月

十二日己酉霽、紅梅一枝令進上禁裏、神宮奏事始明後日可構口由内々申入之處、**御蟲氣雖指出爲片時之事可祇候之由勅答**……  
 十三日……及晚沐浴明日可候神宮奏事始也  
 十四日辛亥有宿雨氣、今日可候奏事始之間、**早朝行水**、奏事目錄遲到來之間遣人、少時到來。仍著直衣……乘輿、大夫將監重興在共、參内、……少時先詣内侍所祈念了、**謁匂當内侍、申云、御蟲氣未快者、付女房奏事目錄内々可進上口如何者、片時之事也、必可有出御云々**、小時出御、於議定所候圓座、奏事目錄讀申、委細在去年記、作法無殊事、仍不能記、……

御蟲氣にあらせられる時の 陛下の護衛慮長き極みであり、又實隆公の慎み深い態度も美事  
 であると思ふ。 極めて厳肅な儀であったことが明である。

六

2 (京都御所東山御文庫記録) 元龜二年二月廿日  
 神宮奏事始記

神宮そうしはしめの事、申**さい**いたしたく候へとも、こんの大ゆ(藤波康忠)に**さい**志ゆ**み**ふ(未補)の事にて候まゝ、もくろくのとのへ**事**い**か**候はん、いまに**ゑん**るん**い**いたし候、さ候へハ、あまりを**そ**な**は**り**ま**いら**せ**候ほとにもくろくの事、くま  
**(は)**ん**む**(む)(小槻朝芝)にまてとのへ**さ**せ申**さい**いたし候へきやらん、神宮のそ  
 うしはしめ候ハ**々**(よ)ハ、志よしやのそも御入候ハぬ事にて候へハ、神**又**主**に**も  
**い**か**々**と**そ**ん**し**候、まへ**く**も**志**せん**い**そ**た**きの時ハ、さい志ゆに申候て、もくろ  
 くの事あひととのへ**ら**る御事と御入候つ**と**(む)とも、いまハよろつむつかしく**そ**ん**し**  
 候まゝ、このやうよい**く**御**わ**(ひ)ろ申候て、仰の**む**(む)々**(お)**御事にお**ほ**せ**く**たさ  
 れ候へく候、**と**

なりハしとのの御爲へ すけ定(柳原資定)

宮内省圖書寮所蔵文書

包紙「元龜祭主補之町女房御文」

又ねきやうの事ハ、頭辨(勤條寺補豊)とのおほせいたされ候よし申とて候、かしく神宮のそうしはしめ、あまりにおそなハリ候へハ、志よしやのそうをもきこしめされかたく候、さいしゆみふの事にて候へハ、せんぎ(れ)いをあさ(小槻朝芳)かの志ゆくねに御さたをへられ候て、いそき御申さた候へく候よし申とて候と(かしく)日の(柳原資定)ゝ一位とのへ傳奏に於いても、上に於かせられても、神慮を畏み奉られる事の深いことが分る。

七

3 (神宮奏事始記) 天文七年正月

・ ・ ・ 前略

天文七年正月廿二日晴光 奏

祭主朝忠卿申造替事

神領再興事

權禰宜荒木田末国申叙爵事

・ ・ ・ ・ ・ 略 ・ ・ ・ ・ ・

廿九日、晴、神宮造替事可爲如何哉之由、内々有勅問之間、於此段先度雖被仰出、將軍家無其典、歟然者爲同前之条、追而一段可被仰出之由、先可被仰下歟之由、令言上畢者此令可下知之由有 勅定

神宮造替事申次第解即令奏達候畢然者被廻御思案、一段可被仰出武家之由勅定候、

此旨可令下知給候也、恐々謹言

三月廿九日 資定

頭辨殿

これにより奏事始が決して嚴重な儀式たるに止まらず奏事目録の内容ハ重大懸案として早速その達成に向って努力されてゐることがわかる。

註一

第二節 正遷宮の復興

「壬生家四卷之日記」永正六年七月廿二日條

神宮造替事

豊受太神宮造替遷御事、禰宜一同正印注進到來候、抑造替事數十ヶ年御延引之條、雖加御修理、可及御顛倒ニ、急度被遂彼節者、天下泰平國家安全御祈禱、不可遇之候、此旨可令申上給、恐々謹言

七月廿二日 神祇權大副(藤波伊忠)判

進上四位史(小槻時元)殿

二

大宮司家古文書

内宮更、近日既可有顛倒之旨、依注進可被造進儲殿之段、被仰付之處、云正遷宮、云假殿、外宮之義(儀)相當順年之旨、捧正印難申之條頗叶理致者哉、於正遷宮者、可爲外宮更所定也、所詮兩宮役者以和談之義、不依年序遠近、不論内外、先當時至朽損宮、被造進儲殿之様、被申調者、可爲神妙之由、所被仰下也、仍執達如件

永正九年潤四月廿七日 美濃守、撰津守

大宮司殿

(請符集)

造替事、就内宮禰宜等歎申、雖被仰出、巡番相當外宮<sup>理</sup>運、不能左右趣、被聞食上者、所被裁許也、早可存知其旨由、可被加下知之狀如件、

六月廿七日 中辨判

四位史殿

三 永正十八年内宮假殿遷宮記

假殿遷宮事、右京兆(細川高國)以進上要脚二宮之儀可有造進之旨、先度被仰付宮司候、於彼代物者、自三日市大夫次郎方、可渡宮司之旨申定候、於其方御催促可然存候

若宮司以下無沙汰之儀候者、可有御託進候、恐々謹言

十一月九日(永正十五年九) 基雄(齊藤)判

内宮一禰宜殿 御宿所

四 外宮遷宮召立記

後柏原天皇御宇永正十八年六月十三日假殿御遷宮之事、去九年壬申六月六日兩宮遷御之事儀定、爭前後、自外宮以常光神主注進子細、**想**宮宮御炊物忌父元滿相共上洛、既雖内宮可爲先之旨相定、依爲外宮中心理運、勅宣并將軍下知成外宮遷御可爲先之旨有御尋、雖然當遷御之時、以祭主宮司嚙、同日同夜勤之、外宮先三時許云々

(皇太神宮遷宮次第記)

永正十八年辛巳六月十三日外宮假殿遷宮

同年同月同日内宮假殿遷宮

旧記云雖有兩宮遷御前後之論依令和睦之間外宮三時許前也、但去永正九年

兩太神宮造替遷宮事令注進之處云正遷宮云御假殿外宮可爲先之由御繪旨

嚴重之故也云々

五 永正文外宮假殿遷宮記

永正十八年六月十三日後假殿遷宮

内宮外宮依爭於遷御之前後、兩宮同日同夜遷宮有之、祭主宮司參勤于外宮遷宮、不參于内宮故、内宮遷宮者、禰宜等計勤仕焉

六 壬生于恒記 大永元年二月十二日條

太神宮依有迁宮之沙汰、内ル撰記者也、雖相撰御装束本様不見出、依官庫退轉令紛失歟、唯仰神慮事

永正十八年内宮假殿遷宮記

永正十八年六月十一日 行事官行賢より藤波弥七への書狀中に曰く

今度御假殿御遷宮儀、調物之事不足簡略之由承候、尤候、於向後者、涯分如先規可

致其心得候・・・

七

△永正十年十月十九日に參宮

(後法成寺尚通公記)

十月十九日、甲寅、晴、・・・京兆今日參宮

三月七日、丙子、晴、加治左京亮參宮下向・・・

△永正十三年四月三日に參宮

(後法成寺尚通公記)

四月三日、甲寅、晴、今朝京兆參宮云々

廿四日、乙亥、晴、小雨濺、右京兆從伊吹上洛・・・

これ以前に彼が將軍の室、其他の從者として參宮した事は可成りの回数に上つてゐる。

八

神宮奏事始記 天文七年二月七日條

皇太神宮神主

注進可早被終次第後沙汰急當宮遷御之節問事

・・・爰去月晦日夜半瑞垣御門炎燒玉垣荒垣者悉令頽落瑞籬如形以調法相殘者哉、玉垣者御門許同前雖相殘皆以令燒失、年中三ヶ度祭禮當月十六日子夜半可奉備御饌時節神居殿内東西如足音兩度奉鳴渡事魯荒祭殿同夜如同奉鳴渡段不思議子細何更如之乎、以夜繼日被急御造替者天長地久諸國。有落字カ饒万民快樂御祈禱何事過之乎仍注進如件以解

天文六年十二月日

大内人正六位上權禰宜荒木田神主行定

禰宜正四位荒木田神主守兼外九人

(續史愚抄) 十一月九日乙巳、今夜子刻内宮瑞垣玉垣門等火・・・。

九

御湯殿の上の日記 天文七年二月七日條

神宮よりしやういんにて、**ねきとも**さうたいの事を申。文にてたまかきゑんしやうの事申。**両**きよくにたつ**ね**らるゝに、はいてうまてはあるましきよし申。ふけへはさうたいの事おほせいたさるゝ。

十

神宮奏事始記

天文七年二月九日癸丑、陰、女房奏書到來、神宮造替事可被仰出、武家爲御使可參申然者可被相副勸修寺中納言尹豊卿畏而承之由申云、仍而已刻許參内、被仰下云、造替事當時定而急速不可事行歟、然者被加御思案、追而一段雖可被仰、自神宮注進之上者先此段可申入之由仰也、資定申云、於造替之儀者只今不可及其沙汰、然者就旧冬**恠**事、一社奉幣事、爲武家可有御申沙汰之由、可被仰出歟之由、言上之處其分相意得可申入之旨、有勅答**即**令勸修寺同道參武家之處暫可相待之由、畠山中務大夫入魂、仍數刻祇候小時爲申次大館右衛門佐出逢之條、予勅定之旨申云、神宮造替之事依無其沙汰、假殿追年破損、然者神官昇殿難叶之由申之間、急速被遂造宮之節者、可爲珍重就中去年十一月晦日玉垣荒垣令燒失畢、又同十二月十六日夜半備神膳之時節、神居御殿如令足

音東西鳴動畢、同荒祭殿内同前鳴動希代之題目也、參者爲一天下別而可有御祈禱之由  
注進之條於造替者追雖有其沙汰、不日光被發遣一社奉幣者、目出可被思食之由勅定旨  
申處、被仰下云造替并奉幣事急速雖不可相調、各被仰聞追而可被申返事、此旨兩人相  
意得可被露之由上意也、又依爲勅使兩人御対面也、可訖直令參内申此旨退出後、聞此  
段難相調之由被申旨、攝津守付勸修寺申之云々、是又不得其意者歟

十一 壬生家四卷日記 大宮司位置写洩敷

神祇大副大中臣朝臣宜被補造皇太神宮使早可令宣下之由、被仰下候、恐々謹言

(天文七年)七月十八日 資定

頭辨殿

十二 (一)社奉幣申沙汰記) 柳原資定

天文七年十月廿九日、伊勢一社奉幣使發遣予奉行于時神宮傳奏也用此次第職事藏人右中  
辨資時辨宣治外社英名史少内記康雄參之

十三 「豊受皇太神宮遷御近例」

今上皇帝天文十年辛丑九月廿日ニ御遷宮之事、去ル歳自ニ内宮神主一禰宜守兼ニ命ニ近江  
ノ國永原某官ニ有下内宮可レ遂ニ御造替ニ之沙汰上、因レ茲外宮神主中大ニ驚キ相共ニ可レ被  
レ遂ニ御造進ニ之由一兩度雖レ望ニ内宮神主中一

十四 神宮奏事始記 天文九年三月廿七日條

豊受太神宮神主

注進可早被經次第上奏被達上聞當宮御造進之事

・・・爰去永正九年兩太神宮造替遷御事<sup>牛マ</sup>令注進之處、正遷宮云御假殿外宮可爲  
先由被儀定御教事嚴重也・・・

天文七年三月日 大内人・・・

「外宮引付」

天文九年三月十一日内宮假殿造宮有其沙汰外宮モ又注進アリ

「注進畧子」

度々令啓上候、造替之支内宮依懇望、江州永原方造進相定候、外宮之儀者、致數ヶ度  
注進、玉子今奉守叡慮上意、此時急以調法可遂造替候哉、順番之儀外宮先造替之望候、  
每篇尊意所仰候恐惶謹言

五月八日 備彦

進上 祭主三位殿政所

十五 外宮引付

廳宣(織田信秀へもの)

可早被遂納受太神宮假殿造替間之支

右兩太神宮造替遷御、二十一ヶ年爲定例之支、天下通規神宮佳例也、然近代其節退轉  
之条、叡慮上意雖致歎訴、依諸國不安泰、造替料難調之故、兩宮假殿朽損短落待日處

也、因茲内宮廻方便佐々木六角殿江造進料懇望之處、既合納受畢、爲兩大神宮遷御前從之事、正遷宮云假殿云外宮可爲先之由、叡慮上意被遂沙汰口宣御加畢也、此時前後於相意者可爲天下非禮、神宮珪瑾者故内宮造替遅引也・・・

然者於外宮造替料、速有進納者兩大神宮共神忠爲歴然者歟、弥家内繁昌武運長久併御家之規模何更如之乎、仍所宣如件

天文九年五月日

禰宜正四位下度会神主判

五月廿九日、度会備彦より謹上織田彈正忠殿御宿所の書簡、亦、信秀の家老平手政秀への私書は畧す。これらは前記廳宣に副へられたものである。これより先き五月十一日付で備彦は信秀及び平手に私伸を与へてゐるが畧す。但、信秀へのものには、「然間六角殿へ依懇望、内宮御假殿造替候」の句の入つてゐる事注目すべきであらう

十六

「外宮引付」前記につづく

太神宮御造替之儀、重而示預候、本望至極候、仍万度御杖大麻并白鳥御樽十荷被掛御意候、神慮旁以目出度奉存候、檜垣左馬允殿越被申候条、造進物金子十三枚渡進之候、當相殘重而可致進覽候恐々謹言

六月六日

織田彈正忠 信秀判

一 神殿 貴報 檜垣右(左カ)馬久俱尚使之

・・・中畧・・・

天文十年三月六日ニ金五枚尾州來ル、久志本周防守殿使其以後代物にて渡ル、合七百貫文彈正忠より渡ル

十七

△外宮引付 天正十年

九月廿六日、遷宮スルノト執行、大慶此時也

于時備彦一神主今度御遷御被成候爲其禮從京都口宣ヲ下ル、彈正忠ヲ三川守ニ事サル、

△遷宮次第記

天文十年辛丑九月廿六日、外宮假殿遷宮

十八

△外宮引付

内宮遷宮、天文十一年十二月一日ニ有之、假殿也

于時守武一神主江州永原方ヨリ造替料進納也、七百貫文歟

△遷宮次第記 天文十一年壬寅十二月一日、内宮假殿遷宮

△河邊遷宮事略 同前

十九

神宮遷宮記(神宮司廳)

外宮遷宮記(上) 三三〇頁

信秀灵夢の事の條

廿

外宮遷宮記(上) 三五〇頁

宇治橋供養の事 ここに清順と兩宮との關係が明瞭である。

勢陽五鈴遺響 慶光院 參照

廿一

伊勢太神宮古記拔萃  
御奈良院御倫(繪)旨

可令致國家安全寶祚之善禱者、天氣如斯悉之以狀  
天文十六年五月一日 右中辨書判

紀伊國

清順上人御房

廿二

伊勢太神宮古記拔萃  
御奈良院御繪旨

清順居住室號慶光院之由被聞食訖殊至太神宮御袞濯橋畢供養成其功之由 叡慮無  
極而今度造替之事應一社之請同可遂其沙汰旨神妙之由 天氣所候也悉之以狀  
天文廿年八月廿日 右中辨書判

慶光院

廿三

外宮引付

一太神宮造替事、役夫工米不可行之条、神慮叵測者哉、然ハ爲三社中一就三可相調之  
様言上一被成二繪旨一訖爰清順上人應二社命一、可勵造營之功云々、早可被奉加之  
由、所被仰下也、仍執達如件

天文廿二年三月廿一日 大和守在判

ウラニ・・・沙弥 在判

一太神宮造替料事相僥分國、令奉加志、可爲神妙、  
猶晴光可申候也 佐々木左京大夫とのへ

廿四

神宮遷宮記第四卷永祿記 二七八頁  
(天文廿四年カ) 四月十六日條

弘治三年正月十六日、二月十三日、四月十一日、十一月十四日

弘治四年四月十一日、五月三日、同九日、同十一日、五月廿二日、六月十六日

永祿二年七月十七日

永祿四年正月十四日

廿五

同記

(天文廿四年カ) 五月二日

弘治三年十一月廿五日

永祿二年二月廿六日

廿六

同記

弘治四年正月十日條

永祿二年二月一日條



廿七 同記 永祿二年十一月二日及び極月條

廿八 同記 永祿六年五月十日條

廿九 同記 永祿六年五月十日條

「公卿補任」(永祿六年)九月廿三日伊勢外宮正遷宮

「皇年代略記」

「異本年代記拔筆」

「久志本年代記」

「細川両家記」九月廿三日に太神宮の御遷宮也、諸關悉開、諸國人參也

卅 惟房公記 永祿元年

後六月五日中山亞相神官傳奏被談云去月廿三日、神宮外宮上棟、無事令沙汰之由注進云々、有或比丘尼号上人。先皇御代被下上人号女房初例歟名ハ・慶光院卜號ス、以諸國勸進之力、此上棟取立者也、内々、又、内宮上棟存立云々、雖不相應之事、末世如此之儀。神慮有子細歟、不測知事也、以上三日ノ記の分也

卅一 伊勢古文書集二ノ下

謙信様御朱印

伊勢太神宮爲御遷宮當國越後棟別三錢併此上之義者可爲心節次第者也仍執達如件

永祿十貳己巳

壬五月廿日 御朱印

所々領主中

卅二

太神宮古記拔萃

太神宮假殿造替事任清順上人例以諸國之奉加可致其沙汰由大神妙被思召畢然者弥擬無二之丹心可遂造畢之成功者 天氣所候也仍執達如件

文龜三年二月廿一日 右中辨書判

伊勢國住人

周養上人御房

卅三

「中山家記」(天正三年)三月十六日乙卯天晴、今夜皇太神假殿遷宮云々

「遷宮次第記」天正三年乙亥三月十六日、内宮假殿遷宮

卅四

續羣書類從卷第二十一

應永以來外宮注進狀

永祿七年七月、同八月吉日、同九月日

永祿八年五月日 各注進

卅五

「遷宮次第記」

永祿八年五月九日。外宮假殿遷宮  
依御萱改也、同月廿六日還御。

「河邊遷宮事略」

永祿八年乙丑六月九日、外宮假殿遷宮

卅六

神社協會雜誌 第二十八年ノ第十號 一二三頁

「遷宮を通じて現はれたる織田氏の神宮崇敬」 大西源一氏による

卅七

外宮遷宮記下 (三九八頁)

天正九年十月 正殿御朽損爲ニ修理ニ遷宮

國君三介殿信雄様御立願人

卅八

外宮天正遷宮記(異本)

當宮兩宮造營吏、可レ執ニ行之ニ、各存ニ其趣ニ別而可レ入レ情(精カ)、無レ故引物等令ニ停止ニ、急速出來候様可ニ馳走ニ、依レ之上部大夫仁平井久右エ門相副、越置候也

天正十年正月廿五日

信長御朱印

伊勢 大宮司とのへ

同兩宮 長官とのへ

同 神主中

同記又神宮引付

先度申遺要脚叟參千貫、此上部大夫平井弓右衛門兩人仁可ニ相渡ニ候也 謹言

天正十年二月三日 御朱印 信長

城介殿

卅九

慶光院文書

太神宮正遷宮事役夫工米不可行之條、令勸進諸國之奉加抽無貳之丹心、早遂其沙汰者、可被思召神妙之由、天氣所候也、悉之以狀

天正十一年六月二日 (中御門宣光) 左小辨(花押)

周養上人

四十

(外宮引付) 大日本史料

天正十二年甲申三月廿三日仁羽柴筑前守殿ヨリ正迂宮之金子、兩宮江五百枚与八木千石与上部越中殿、周養上人江渡御置候

註四十一〜四十三(無し)

四十四

天正十三年造宮記

今度天正十三年遷御之時者、長官禰宜無ニ故實ニより長官禰宜衆より懇望にて御寸法を出す也」

四十五

一居玉居様相違也、予公文所ニ異見申、十五日令レ打之・・・從ニ長官ニ異見など相心得  
とかく不レ申候へ共、餘相違神慮難レ測故、今日十五日又昇殿の時なをされ可レ然由予  
申之・・・

四十六

御巫清直氏 二宮東西寶殿位置考

福島敏夫博士「神宮の建築に関する史的調査」

第三章 兩宮の東西寶殿 二、位置と方向

### 第三節 神領再興

註一

大乘院寺社雜事記 長享二年二月廿三日

一神三郡事、國司押領不可然事、返事、此事ハ彼三郡地下人共侍分者槌失之、凡下ナ  
メンタラト申事ヲ行候キ、天下後沙汰以外次第也、爲國司可沙汰旨蒙仰之間、如上意  
成敗仕了、其忠ニ被仰付候、雖然御神事物等ハ、爲一事無違亂申付候、更以非私儀  
之由申入之、士民共興成爲諸國不可然旨、及後沙汰了

二 1

内宮神領本水帳（神宮文庫）

北伊勢

天照皇太神宮御供米

・  
・  
・

惣以上六百貳拾五石九斗五斤敷

同錢成四拾八貫參百三拾五文

米錢合六百八拾壹石七升五合之勺敷

天正七年十一月五日瀧川殿比之時月日付

天正十一年八月廿一日國司比注進之時月日付

國符神戸分

又以上百拾壹石五斗敷國司比言上之時國符神戸分書加

十人連判在之

眞上

御奉行所

南伊勢

天照皇太神宮御供米

・  
・  
・

以上參百九拾五石壹斗六升五合敷

・  
・  
・

三口合三拾六石三斗七升

一雞鳴 役人分

一おさ分 有余

天正十一年九月二日 連判眞上

御奉行 右惣以上交合<sup>異</sup>

◎以上を米をなほして天正十一年の時のものを合計すると千二百二十四石余となる。

外宮神税上分帳

外宮一同神税上分五郡之内毎年

一納所之分

員弁郡

かこえ(川曲)郡

朝明郡

三重郡

鈴鹿郡

惣以上

天正七年十月十日

◎この会計は五郡で六百七十四石弱となる。

即全伊勢では大略内宮に近いものとなるであらう。かく推測すれば、兩宮の神領は伊勢國內で二千石以上はあると見てもよからう。

二二

外宮引付

豊受皇太神宮神主天正十一年九月注進

同じく假名書のもの。

大日本史料天正十一年九月條

三

應永以來外宮注進

天正十年二月外宮神主解狀

但し、これは偽文書か又年号のあやまりであらう。天正十年に秀吉が太閤である道理はなく、此の頃にはまだ檢地はそれ程の勢をもつものではなかったから。しかし、時代はかく向ひつゝあつた。

四

文祿神領地沙汰文

文祿三甲午年七月三日地檢ニ御越之處、以使者先御見廻被申候、此方使<sup>開</sup>面子五郡守將

從太閤御使者處

稻葉兵庫頭殿・・・以下七人

・・・

又兵庫殿(別番一通)

一御狀之通上人より内儀承候、今度御檢地之儀ニ付御下御大儀存候、然者神宮分之事者繩打以下從前之被置除候、此刻も無相違之様ニ可預御心得事公私之可爲御神忠候、御意度々間又一通<sup>ふ</sup>お<sup>ま</sup>り(之故召)各へも内々ご相談所仰候、委細丈者可申傳候恐々謹言

内宮長官 同神主中 守通

七月三日

稲葉兵庫頭殿 人々御中

一 急度申遣候、仍神宮領御指出之儀無油斷可被申付候、神宮領もて(被)成御檢地御帳を堅可被成御寄進之旨御意之間其旨神主中へ可被仰付候則從御兩三人様御折辱(被)遺之間進之候、神主中へ忽可被仰談候恐々謹言

七月三日

岡本兵衛尉

宮神領 御きも入

條々 (此の記神宮綱要に参照す)

一 今度伊勢惣國檢地儀雖レ被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>宮川<sub>一</sub>内之儀大神宮爲<sub>二</sub>敷地<sub>一</sub>條、兩宮儀崇敬上者、不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>檢地免除之事

一 兩宮宮司神主年寄共、猶以神慮奉<sub>二</sub>尊敬<sub>一</sub>諸度以下猥儀不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之事

一 自<sub>二</sub>宮川<sub>一</sub>内山林竹木屋敷田畠等如<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>可<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>其外諸役全免許事

右條々永代不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>者也

文祿三年甲午十一月十六日 朱印

山田惣中

伊勢宇治惣中

大湊惣中

五

文祿神領檢地沙汰文

御朱印のおもて

伊勢多氣郡神領目録

一 貳千五百石 齋宮郷、上野村、中村、竹川村

同度会郡内

一 百四拾石 うに

合貳千六百四拾石

右令寄附之訖金可社納者也

文祿三年九月廿一日 御朱印

祭主

宮司

兩宮長官

神主中

土人

六

同記

伊勢度会郡内社領目録

一 拾三石

たぬ开村

一 三石五斗

さうち村

一 四百五拾石 野尻村  
一 六拾石 田ミヤ寺村

合五百貳拾六石五斗

右令寄附之訖金可社納者也

文祿三年九月廿一日 御朱印

内宮 長官神主中

七 同記

天照皇太神宮神主

注進可早被經次第 上意神領収納堪略之夏

右之趣號神領於伊勢國多氣郡雖致宮勢近來興小之爲躰故諸神事可及退轉者哉就其御寄進令希折節神領之内茂被當御繩神宮之悲嘆謹言上之旨先以御打出分神納者之村仁登奉捧連署之處以替地被仰出敷何様仁茂神慮可然於預御心得者一天增長國土可爲永安之狀仍注進言上如件 以辨

文祿四年七月六日 大内人正六位上荒木田神主安怡出

禰宜正四位下荒木田神主守通 以下九人

勢州多氣郡齋宮社領出米方玖百石之事以檢地之上令寄附畢全可社納候也

慶長元

十二月廿八日

兩宮神主中

上人

八

註(二)によつて伊勢の神領高が二千石〜二千五百位と思はれる。

次に應永以來外宮注進

豊受皇太神宮神主

注進早可經次第上奏被達叡聞、神領子細問之事

右當宮御領、到國々在々、近年御檢地以來、不納分千四百餘矣、依之神事御供等、雖勵勤仕次第、神宮零落之間、既可及退轉事、寔悲歎之限不遇之處也・・・とあるから兩宮を合せて、伊勢以外の高が三千石位はあつたであらう。かく考へると、内宮側の多少の誤りはあつても、実収入は寧ろ少なくなつたのではあるまいかと思へられる。

九

神領帳(神宮文庫)

兩宮御朱印三千五百四拾石之内内宮給人持高之覺

一 高貳百五十拾 長官料 开面守治宗

一 高貳石五斗 長官職田 同

・  
・  
・

一 高 百八十石内六拾石ハ買得不分明 慶光院寄附

一高 八石記略

照雲寺買得

一高 三石六斗三升

法泉寺神宮二寄附

・  
・

一高 二一石一斗五升

神事料

内九石八斗五升 藤波權兵衛預り

内六石 澤田多門預り 同三石貳斗五升 上首分

内二石五升 澤田三之丞預り

一高 二七石

神宮雜用

合千四百四拾四石四斗六升貳合

外二於野後村

御朱印高四百五拾石之内現米百貳拾石十人之神主壹人拾石充配分 但長官八三拾石配分

已上

神主中

元祿九年丙子十一月十六日 内宮長官判

此一冊從内宮御公儀記指上ヶ候

卯二月十一日

十 應永以來外宮注進 天正十二年豊受皇太神宮神主解狀